70th ANNIVERSARY

関西学院同窓会大阪支部創立70周年記念誌

大阪を育んできたMastery for Serviceの
過去・現在・未来



関西学院同窓会大阪支部の七十年と今、そして未来へ

風に思う空の翼、輝く自由、MASTERY FOR SERVICE。

一体この歌を何度歌ったことでしょう。いろいろなタイミングで、いろいろな想いの中で、ある時は笑いながら、ある時は涙しながら。そして同時に多くの同窓と出会いました。先輩であれ後輩であれ、その出会いはどれも心地よいものでした。同じ学院を卒業したという、ただそれだけの理由で人と人はこんなにもつながりあえるのかと、改めて人間という生き物の魅力を噛みしめています。

縁あって大阪支部が創立七十周年を迎える時に支部長を務めることになりました。そこで後の時代に、二〇一〇年代に何を考えたのかを伝えてみたいという気がしました。今は「グローバル社会」だと言われています。少し前までは「国際化」といった言葉がもてはやされましたが、もう国境も地域も関係なく、個人と個人がつながる時代になったのだとか。

計算機から発展したようなスマートフォンが大流行りですが、いずれはSNSを主体にした別の機器が生まれるのではないかとも言われています。お金も変化し、仮想通貨と呼ばれる「国」が関係しない新しい貨幣も生まれてきました。人と人のつながりが大きく変化している時代に、同窓会というオールドタイプの組織が、どのような役割を果たすべきなのでしょう。この周年という機会に改めて考えてみたくなりました。きっかけは四十周年にも記念誌がつくられ、それを読んでいて明らかに卒業生同士の関係性が変化していることに気づいたからです。七十周年にも記念誌を作り、未来へのメッセージとして出来るだけ明確に、「感情」も含めて今を伝えることが出来ればと思っています。

記念誌発行の上で取材協力をしてくださった皆様、編集にお力を頂いた皆様、ご協賛をしてくださった皆様に巻頭ながら心より感謝申し上げます。

大阪支部支部長　富田順治

宝塚歌劇

阪急阪神東宝グループ

幕が上がる、夢がはじまる。

TAKARAZUKA Revue



©宝塚歌劇団

宝塚大劇場
阪急宝塚駅下車
（営業時間/10:00～18:00 水曜定休）

東京宝塚劇場
JR有楽町駅、東京メトロ・都営地下鉄日比谷駅下車
（営業時間/10:00～18:00 月曜定休）

●お問い合わせ TEL.0570-00-5100
※一部の携帯電話、IP電話などからはご利用いただけません。

【宝塚歌劇公式ホームページ】http://kageki.hankyu.co.jp/【宝塚歌劇公式携帯サイト モバイルカラヅカ】http://sp.takarazuka.tw/



Contents

関西学院同窓会大阪支部創立70周年記念誌

大阪を育んできたMastery for Serviceの過去・現在・未来

【対談】同窓会がするべきこと 学校がするべきこと …… 4
平松一夫（関西学院大学名誉教授）
富田順治（同窓会大阪支部支部長）

支部長訪問記 …… 12

母校通信から見えること …… 22

ご寄稿 …… 26
中島直躬（第二十二代支部長）／恩地四郎（第二十三代支部長）

「大阪支部四十周年記念誌から考えたこと」 …… 28

大阪支部のホームページ …… 29

インタビュー（ホームページより転載） …… 30
樋口　武雄（大和ハウス工業株式会社　代表取締役会長・CEO）
利倉　晄一（利昌工業株式会社　代表取締役会長兼CEO）
四方　邦夫（株式会社三社電機製作所　代表取締役社長）
西條　和彦（天野酒醸造元　西條合資会社　会長）
西名　弘明（オリックス株式会社　前副会長）

関西学院同窓会大阪支部組織図と歴代支部長 …… 61



DAYS OFFICE

「オフィスらしさ」より、これからは「働く人らしさ」が大切。
ワークスタイルとライフスタイルの境目があいまいになる中で、
働く場としてのオフィスに求められることも変化しています。
仕事のことも、プライベートのことも、同じ感覚で話すことができる。
予想もしなかったような人やモノと出会い、日々気づきや発見にあふれている。
一人ひとりの「らしさ」に寄り添い、自分ならではの気持ちいい使い方ができる。

働く人が大事にしたい価値観を、
ちゃんと大事にできる余白があるオフィスへ。

ワークスタイルも、ライフスタイルだ。

コクヨ株式会社　http://kokuyo.jp/days　コクヨお客様相談室　TEL.0120-201-594

KOKUYO



【対談】

同窓会がするべきこと
学校がするべきこと



富田　順治（とみた じゅんじ）

関西学院同窓会大阪支部　第26代支部長
1967年 関西学院大学経済学部卒
株式会社竹中工務店元顧問

平松　一夫（ひらまつ かずお）

関西学院大学名誉教授
1970年 関西学院大学商学部卒
日本学術会議会員、日本会計研究学会会長、アメリカ会計学会副会長、世界会計学会会長、公認会計士・監査審査会委員、企業会計基準委員会委員、韓国会計基準審議会国際評議員、国際会計士連盟国際会計教育基準審議会委員、IFRS(国際財務報告基準)翻訳レビュー委員会委員長、関西生産性本部副会長などを務め、2002-2007年には関西学院大学学長を務めた。
現在、関西学院常任理事、金融庁・企業会計審議会会長、東京商工会議所国際会計検定企画委員会委員長、大阪商工会議所ビジネス会計検定委員長など、数々の役職を務めている。

同窓会の役割と学校の役割

富田　冒頭からいきなりではありますが、同窓会と学校の関係について。今、同窓会本部は「寄付文化」ということをしきりに主張しています。でも正直これに対し、私は疑問を感じています。日本風に言えば「親しき仲にも礼儀あり」というところでしょうか。すこし一方的ではないかと。もし同窓会が寄付文化を培うのであれば、学校も同窓会に何かをしなければいけないでしょう。例えば同窓生の子息が受験する時のメリットなどが少しあってもいいのでは無いでしょうか。

平松　それに関しては何度か僕も提案したのですが、結局ダメでしたね。卒業生は二十万人。それで枠を設ければあっという間に埋まってしまう。中高にまで設ければ、それこそ全て同窓生の子息になってしまうという理屈でした。

　ただ意識を持っている人もいました。本当は初等部が出来た時に導入すれば良かったんでしょうが……。

富田　あの設立の時も、公立の先生ばかりが来て、初代校長も随分悩んでおられましたね。校長ご自身で先生を選ぶという状況ではなく、すでに先生が決められているところに彼がぽつんと放り込まれたようでしたし。

　開校して最初の一年は授業もうるさくて評判も悪かったですが、あれも公立の小学校的な悩みだと言えませんか。なかなか公立では父兄からの反発を恐れてきちっと注意出来ないと聞いていますが。

平松　今も苦労しているみたいですよ。ただ改革は初等部が一番やりやすいと思っています。また中学部、高等部も部長の選び方を変えようとしています。今までは各部長は内部から選出されていました。つまり理事会はタッチできなかったんです。そんな「お任せ」では学校としての体をなさないでしょ。理事会がきちっと責任をもって人選をすることで、一つの哲学をもった学校の運営が可能になる、そういう改革を目下目指しているところなんです。

富田　学校にきちっとした意志がなければ、もう同窓会としても何もせんとこう……という気になりますよね。

平松　そんなことを含め、経営的な戦略を理解できる教員は皆無と言って良いで

しょう。分かっていないということ自体がとても恐ろしいことではあるのですが。

学債は発行しない？

平松　大阪支部創立七十周年ですか。七十周年ということで言えば私が中学部に入った時…その前年かな、それが七十周年だったと記憶していますね。

富田　体育館が建てられたり。あの時学債が発行されているんですよ。十年債で金利も五パーセントでしたでしょうか。今も各学校で学債を発行していますが、金利はゼロです。すると「半分寄付する」とか「全部要らん」とか、そういった声も出てくるようになるんです。ですので関西学院も学債を発行するべきだと思うんですが。

平松　そうですね。何か特別なことをする時に、それは提案するべきですね。

富田　実は初等部が設立される時に提案したのですが、受け入れられなかったんです。あの頃の風潮としては関西学院の資金運用に随分同窓会からも異議が唱えられていて、「他の学校は皆、うまくやっているのに、なんで関学だけできないのか」と言われていたころでした。ただその後リーマンショックが起きてパンクしたので、学債に関しても余計に及び腰になったのでしょうね。

平松　財務政策委員会というのがあります。ここはリスクを絶対に受け入れないんですよ。学債にリスクがあるかどうかと言えば無いと言って良いわけですが、それを含め大変神経質になっていることは事実です。それによって何もできなくなる。低金利の時代であれば、多少のリスクを負ってでも、少しでも儲けを考えないといけないのですが、完全に「守り」に入っていますね。

富田　金融機関から見れば、学校はとても「良い」。少子化とはいえ安定的な収入があるので。多少のリスクを怖がることは無いと思うのですがね。

平松　関西学院というブランドから考えるとその通りです。もっとブランド力のない学校でも、経営機構はしっかりしているところは沢山あります。東南アジアからの留学生に、彼ら専門のカリキュラムを用意するとか。例えば英語の授業です。東南アジアでは英語は基本的に「大丈夫」な状態にあります。言い換えると国の力が弱いので国民はしっかり英語力をつけておかないと経済的に立ち行かないのでしょう。日本は少しばかり国力があるので、ぎりぎり国内でやって行ける。韓国はボーダーラインですね。

　韓国はかつては日本同様に英語が苦手な国だったのですが、一九九七年の経済危機でＩＭＦが入ってから英語力がぐっと上がりました。そうすると富裕層は子供を韓国の大学に行かせないみたいです。アメリカの大学に――その方が将来役に立つというんです。日本とどちらが良いのかは議論の余地がありますが、「日本語でやっていける」という状況が将来的に「大きく取り残される」ということになる可能性も無いわけではありません。

富田　世界の大学のランキングに現れているのでは。

平松　その通り。だんだん下がっていますよね。関西学院などは入っているのかな？日本の大学のランキングを先日イギリスの雑誌が掲載していましたが、そこには入っていましたね。でも順位は立命館、同志社、関学の順番でね（笑）。

富田　偏差値もこの頃はたいしたことないですよね。高いのは国際学部のみ。

平松　そうですね。僕は競争力の弱さは、今一つ規模が小さいことに原因があると考えています。実は大半の大学関係者は規模を大きくすることに反対しています。財務的には規模が大きくならなければ戦略的な動きがとれないんです。近畿大学や立命館の広報戦略は素晴らしいと思いますが、その技術以上に潤沢な資金がある。関学の場合、今国際学部が出来て少し資金が出来てきましたが、その前は本当に貧相でした。二、三十年前の状態のままか……という感じで。

　ただ改善されたとはいえ、まだまだ弱い。ましてやスーパーグローバル大学なのですから、きちっと人を配備しないと。そのためには先ほどの学債も考えられるのですが、基本的には学生からの授業料といった主な収入をもっと増やさなければだめでしょう。

短大をつくっては？

富田　学生の新陳代謝を考えると短大を持っているところが今は好調ですよね。聖和短期大学がその良い例だと思います。

関西学院の名でもっと多種多様な短大を設ければ良いのではないですか。といいますか……昔はあったように思うのですが。

平松　かつてあった工学部のことですね。まあ、短大は別にしても薬学部と看護学部、そして観光学部は欲しいですね。特に観光学部は国の政策とも合致しているので。観光プランだけではなく、ホテルなどの経営を含めた研究。立教はＯＢにホテル経営者が多いのでとても早い段階から挙手しましたね。京都大学でも大学院で取り上げ、コーネル大学も力を入れています。僕は観光、薬学、看護のいずれも「サービス」という大きな分母の上に成り立つものだと思うんです。病院経営も視野に入れたい。ほかの大学がまだそんなに着手していないところを、ブランド力のある大学が先鞭をつけることがとても大事なのですが……これも動いていませんね。

富田　例えば看護師も注目すべきでは。看護師には色々な制約がありますが、高齢化社会が進んでゆくとそうも言っていられないでしょ。医療的な知識をもった人材を生み出さないと。大きなマーケットになるのではないかと思うのですが。

平松　それについては提案をしたのですが、反応は良くなかったですね。

富田　誰に話をするのがいいのでしょう。逆にどういった人が決めているのですか。そこに専門家に来てもらって話をしてもらうことが出来れば、効果があるのでしょうか。

　短期大学は基本二年で卒業ですが、研究科みたいに勉強を継続すれば資格はどんどん上がっていきますしね。医者になるよりも早く、医者に類似したことが出来るようになる。これは大きなマーケットだと思いますけどね。

平松　今は特色のある幼年教育ということで定評がありますから、そこから派生した看護師というのはいい流れだと思います。ゼロから生み出すのもいいのですが、別の学校と提携するのも良いかもしれません。すでに設備や先生がそろっているので。

　ただ合併ということになると、学内には過剰に反応する人もいるんです。かつて聖和と合併する時にも少しそんなことがありました。

　ただ学びの分野を広げるということは大事なんですよ。せっかく初等部があって、中学部、高等部と進んでも、その先に広がりがなければ、学生たちは別の大学に行ってしまいます。例えば医学部ですね。これを目指す子は別の大学に行かないといけない。そこで兵庫医大と提携を結んで生徒枠をもらっています。その数を増やしてゆく……という方法が考えられますが、本当は医学部があれば良いわけですよ。ただ現状医学部を新設することは不可能です。すると合併を考えたい。でもそんな話に乗ってくれる大学など早々ありません。看護・薬学で留めるのが現実的だと思います。いずれにせよいつまでも文系の総合大学ではまずいことは事実ですね。

富田　そもそもランバス先生は医者ですよね。日本ではパルモア病院もつくっておられる。そう言った経緯から考えると関学に医学部は欲しいですよね。

平松　パルモア病院が興味を示さないのでね（笑）。産婦人科なので本当はベストマッチなんですけどね。神学から医学……ゆりかごから墓場まで。関学の牧師は結婚式も出来るわけですから、関学らしい一つの概念・コンセプトで貫いた学問形成が可能になると思うんです。



同窓会の仕事は？

富田　単刀直入に言いますが、どうして学校は同窓会にそっぽを向くのでしょうか？

平松　一時は同窓会本部を学校と一体化させようという動きがありました。私もそうあるべきと考えました。

富田　今のままでは本部も組織的な動きも出来ませんし。中にはそれを事務員の能力の問題だと罵倒する人もいますが、それはあまりにも可哀そうな話で。

　あまり良くないことかもしれませんが、やはり慶応の三田会と比較してしまいますね。あの組織力からは学ばないといけないことが多いと思うんです。同窓会の評議員になるのにも、皆さん一生懸命「票集め」をするそうですから、結果として大変名誉な職になるんです。それくらいの魅力のある同窓会にするにはどうしたらいいのか……そのためにもやはり学校と一緒にならなくてはいけないと思うんです。

　ましてや今の同窓会には「同窓会が率先して寄付金を集め、学校に渡す」というシステムがありますが、どうも理解できません。同窓会本部が寄付を促すということは良いでしょう。しかし実際に寄付を強行してゆくことは本末転倒のような気がします。

平松　その通りですね。

富田　それだけではなく、宇良関をはじめスポーツで頑張っている人に対する奨励金をやめろという流れにまでなっています。それよりも経済的に苦しい学生……年間に五十名ほどいるのですが、彼らに奨学金を与えてサポートすることが同窓生としてやるべきことだろうとも。それはおかしい。それは学校のするべきことであって、同窓会のすることではない。それよりも奨励金の偏りを無くして、満遍なく行き渡るように考える方が良いと主張しているのですが……これもなかなか通りませんね（笑）。

平松　苦学生に奨学金を出す。これは学校でもやっていますが、今学校の方で議論してるのは、それだけではだめだということです。特色のある学校を目指しているのですから、特別な能力のある学生にも奨学金をということを始めています。成績の良い子にも出します。国立に流れないためにね。でもそれだけではなくスポーツに対しても、文化活動に対しても、またボランティアに対しても。正課外活動を正課活動に準じるものとして評価の対象とする……これは今村田学長が力を入れていることで、私も評価しています。これを延長してゆけば「同窓会活動も学校と一体化する」という発想は自然なものと言えるでしょう。しかしそれが同窓会サイドから反発があったので、今は議論されなくなったわけですよ。

富田　まあ、これについては今後も方々に言って回るしかないのでしょうが……それと、七十周年に大阪支部として提案したいことが別にあるんです。大阪支部を含め府下には十七の支部があるんです。更に公認団体が幾つかあります。かつてはそれらすべてが大阪支部の傘下にあったのですが、今はそれぞれ独立してしまい、大阪支部は市内の居住者とそこで仕事をしている人の集まりになってます。

　一方東京支部は東日本センターとして一つにまとまり、きちっとした活動をされています。大阪も西日本センターとしてまとまるべきではないかと考えているんです。とはいえ京都、神戸をまとめることは現実的ではないので、大阪府下を完全に連携させたいと思っているんです。そのためにも府下の各支部の支部長を訪問して意見を聞こうと思っているんです。



平松　七十周年の提案としては良いと思いますよ。記念すべき年にそういった問題提起があって、府下の各支部の意見も集めることが出来たということは、議論のきっかけとなるでしょうから。ただ、その構想を「見える化」してゆかないといけませんよね。「ああ、こうなるのか」というものを提示して共感を得る。仲間を増やす。でないと「話は分かるけど、どうしたらいいか分からない」というレベルで終わってしまいますしね。



平松　おっしゃる通り、同窓会は寄付だけの団体ではありません。自分たちが楽しく過ごす場でもあるのだから。母校に通う貧しい学生のためにお金を出す団体となってしまえば、もう誰も来なくなりますよね。大事だとは分かっていても、来なくなる。

富田　各地方支部は自分たちの努力で色々イベントをやって、出来るだけ関学の同窓生が交流し、何かあった時に助け合おうという関係づくりを目指しているんです。

平松　元来の同窓会の在り方として、とても参考になったのが箕面自由学園です。関学と比べれば比較にならないほど規模の小さい学校なのですが、その創立九十周年の時に記念誌を発行されたんですよ。それを読んで初めて「ああ、そういう学校だったのか」ということを理解した俳優の升毅氏が、自ら名乗り出て同窓会の東京支部代表幹事となったそうです。今はもちろんホームページもあるので、沿革は常時UPされているのですが、どうも紙で印刷されたものというのは迫力が違うようですね。

　ともあれ、同窓会というのは特色ある人、活躍している人を紹介し、それを応援してゆくことが喜びになる……学校にとっても、それは喜ばしいことで、それこそが学校と同窓会の本来あるべき関係なんだと思います。

　こんな人材がいる――支部の役員は知っていても一般の会員は知らない場合が多い。また大学にはそういう情報が集まっているので、意図的にPRしてゆくとか。幸い同窓会本部はきちっとしたデータをもっているので学校と連携してゆけば――自由学園の規模でそれが可能なら、関西学院であればもっと大きな波動となるはずではないでしょうか。

　学校と同窓会は一体化が望ましいのですが、それが難しいのならその手前の提携を結んで運営していくべきだと思います。

富田　同窓会からの努力次第というところですか。学校としての努力は考えられないのでしょうか。

平松　最初にあった「同窓生の子どもへの優遇」についてですが、私が提案した意見は、関学三代目、四代目ということであれば人数もそんなに多くないので、受け入れやすいのではないかというものでした。それでも結論はNOでした。どうしてか――こういった枠を、戦略的、あるいは学校の私学的な方針として理事会が主導で検討すればよいのですが、今は教授会がそれを検討することになっている。そこに問題が無いと果たして言えるかどうか。

　例えば……学長を選ぶ方法も、現行の学長選挙ではなく、選考委員会が選んで理事会が承認するという形にすれば、学長はかなり強力に腕を振るうことができるようになると思うんです。実は今この方法の変更について議論しているところで、もしそれが成立すれば同時に理事長、院長の選び方も変えてゆくことになるでと……。

しょう。

　こういった「教職員の顔色を見なくてよい」学長の存在があってはじめて、例えば同窓と連携し、新たな学校との関係を構築してゆくことが出来る。あるいは理事会が「こうあるべきだ」という案を、学校として実行してゆくことが出来る。そう思うんです。

富田　そういった案はどこで「通す」ことになるんですか。

平松　大学教授会です（笑）。その決定に学長が従う――おかしいでしょ。いずれにしても学長の権限の強化が必要です。教授会はあくまでも参考意見であって、最終決断は学長がする、そういった運営でなければ何も前に進まないと言っていいでしょう。

富田　企業で言えば従業員の間から選んだ社長ではなく、経営の専門家集団が選んだ社長にするということですね。ぜひ実現に向けて頑張ってほしいですね。

魅力ある関西学院にする為に

富田　残念なことに、関関同立の中で関学の地位がどうしても落ちてしまっています。これについてはどうお考えでしょうか。

平松　私が学長であった時代にこんなことを考えました。例えばスポーツ。当時関学のスポーツも低迷していました。学長になる前にすでに商学部ではスポーツ入試を始めていました。それを全学部で行うようにしました。もちろんこれについては賛否両論あります。大学はスポーツをする場所ではないので。ただスポーツも、グリークラブのような文化活動も同様ですが、そこで懸命にがんばった人間が、人間として磨かれ成長するということは大いにあると私は信じています。人と一緒になって組織的に成し遂げる。あるいは組織の中で己に磨きをかける。学業で学びきれないものがそこにはあるはずですから。

　で、最初、単に強くするというだけでは目標が明確ではないので「関関戦で勝つ」というところに照準を合わせたんです。あの頃負けっぱなしやったので。

富田　おかげで今、総合八連覇ですね。

平松　関関戦で総合的に勝てるようになると、次の目標は――オリンピック選手が出ていないということです。私としては是非ともスポーツ健康科学部を創設したかったんですよ。強い人を養成できるので。

富田　そこで育った人は、引退後も良いコーチになりますものね。

平松　まあ、それは実現しなかったのですが、総合関関戦に勝てるようになると、実際にスポーツ系の良い生徒も集まるようになりました。色々な高校からも来てくれるようになりましたしね…もっともっと来てくれると本当に強くなると思います。ただ受け入れ態勢が出来ていないんですよ。入試はしますが、そのほかの受け入れ態勢がね……。

富田　一人しか来なければ、あとに続きませんしね。

平松　例えば青山学院の箱根駅伝。監督さんが寮で生徒さんを指導している――関学の場合は自宅から通うしかない。寮がない。いきなりは無理かもしれませんが、順番に各クラブが寮を持つようにする。そういった受け入れ態勢が出来ていないんですよ。土地の問題、建物の問題など色々ありますが、目標さえはっきりさせれば、それこそ学債を発行するなど手はあると思います。また人にも共感してもらいやすい。新しい学部だって出来るかもしれません。

　オリンピック選手を出すことがどれほど大学に力を与えるのか。それは宇良関の例を見ても明確でしょう。あの化粧まわしを見て、それを誇りに思う同窓生も少なからずいます。陸上百メートルの多田修平選手のように身近なところに、全国、世界で活躍する人間がいるということが大学にとっても、同窓生にとってもとても大きな力になるんです。勉強とは関係は無いのですが、そこにプライドも生まれてきますしね。ただ残念ながらそこへ向かう仕組みがまだできていない、それが現状です。

富田　一方で学生の中で女性の占める割合が高くなっていますね。これについても感じておられることはあるのですか。

平松　かつて「女性の働き方を考える授業をしたい」と主張されていた先生がおられました。随分早期のことだったので、大変先見の明をお持ちだったのだと思います。僕の知っている範囲でも、入社して結婚するまでは男と対等に頑張っています。結婚して家庭を持つとそれが難しくなるんですよ。必然的に在宅勤務を考えて行かないとならなくなる。なので見積とか設計の分野は割に女性が活躍しやすい場所ではありますね。

平松　そういったことを大学のカリキュラムにも取り入れていくことが良いのでしょう。実際生涯学習課が正課としてではなく、検定のための授業などを企画しているんですよ。そこで、今の女性と社会とをトータルに俯瞰した要素を加味した新しい科目を作るということは考えられますね。フィナンシャルプランナーなどのように。

富田　同窓会の評議員にも女性は少ないので、そういったプログラムがある大学であるなら、それに応じた変化が大事ではないかと思いますね。

　またお話をお聞きして学長の選び方…などを変えることで、体質が変わり、多くの問題が解決するのであれば、同窓会も同様に役員の選出方法を考え直さないといけないでしょう。そうすることでがっちり両者が足並みをそろえることが出来ますが、東京に行かれました。おっしゃる通り、今は学生の半分が女性です。逆に同窓会にお聞きしたいのですが、「卒業後の彼女たちの繋がり」というのは現状どうなんでしょう。継続されているのでしょうか。

富田　同窓会の活動参加という上では大きな問題です。主婦の方、仕事をされている方、あるいは主婦と仕事を兼ねておられる方……いずれにおいても「そんなことに参加する余裕はない」という意見が大半のようですね。

平松　そうですか。HPなどを通して魅力ある活動をPRしてゆくというのも手でしょうね。スマホでさっと見られるような。学校としては、卒業した女性が魅力を感じるような講座を梅田キャンパスでやっています。コンテンツを見ていると僕らでも聞きたいなと思う講座は沢山ありますよ。単位取得のための授業ではなく、同窓生が生涯学習の一環として、今だからこそ学びたいと思う内容……特に女性が関心を持ちやすいジャンルというのがあるので、そういったものを展開することで繋がりを構築したいと思っているんです。

富田　現役学生についてはどうなんでしょうか？

平松　将来、就職も含めた「女性の形成」を目指す内容を準備することですよね。本当は「女性」と区切ることが良くないかもしれないのですが、現実を見ていますと両者には、社会の受け入れから個人の認識のあらゆるレベルで「違い」があるように思います。であれば「違い」のある中で、もっとも質の伴った磨きというのも考えられるのではないかと。

　今の企業の状況はどうなんでしょう？例えば「重い」ものが占める製造業では採用は殆ど男性ですよね。でもそれではしまいに良い男も来なくなるんじゃないかな（笑）。

富田　女性を採用するという点においては、随分進んできていると思います。ただ女性は制約が多いのでネックにはなっている、そんな可能性を先生の話から感じました。本日はありがとうございました。

支部長訪問記








大阪支部創立七十周年を迎えた今年――世の中は「グローバル化」の名のもとに国や国境を越え、個々人が直接結びついてゆく時代となっている。政治、経済だけでなく、それこそ個人の価値観が本質的に変化してゆく、いわば細胞レベルでの世界の変化をこれから目の当たりにしてゆくことになるのではないだろうか。

そんな時代において大学も変化を求められている。伝統ある関西学院大学もこれまでの価値に安住はしていられないであろう。捨てるもの、継承するもの、こだわるべきもの、こだわるべきでないもの――雑多に並んだ要素からの取捨選択は、いずれも熟考を必要としつつも、決断のために潤沢な時間を与えられていないことも事実である。それはまた違ったレベルで同窓会に関しても求められることでもあろう。

富田順治支部長はこれらの観点から「同窓会とは、一体誰のために、何をしなければいけない組織であるのか」について再考したいと考えた。そこで創立七十周年という機会に、大阪府下の各支部の支部長と意見を交わすことにした。以下はその記録と支部長を含む編集グループの感想である。

第一日（四月十一日）

茨木支部



茨木支部長
白井　啓介 氏

最初に訪問をしたのは茨木支部であった。支部長白井啓介氏のオフィスにて、まずは目下茨木支部のもつ問題点について尋ねた。最大の問題は財政だが、同様に深刻なのは全体的な無関心ではないかという。刷新のために女性メンバーにお願いをしてホームページを開いたが、彼女も結婚と同時に去り継続できなくなっている。

総会以外のメインの活動は茨木市と商工会議所が主導で開催しているイベントへの参加。長年関西学院ののぼりをたててかき氷を売って来た。売り上げは悪くなく、盛り上がりを見せてきたが、同窓の参加者は年々減り継続は難しい状況であるという。また二年に一回バスツアーを開催している。それも同窓会の現幹事一六名のための企画と言える。現状としては白井氏の存在が頼みの綱であり、今年の総会も彼の病気療養のため、予定を延期することになった。

茨木支部としての将来を考えると「もっと広域のブロックを形成し、統合をしてゆくことが望ましい」というのが白井氏のいつわらざる思いであった。

高槻・島本支部



高槻・島本支部長
山城　宏夫 氏

次に高槻・島本支部の常任理事石川宏氏と支部長山城宏夫氏に会う。平成元年の発足以来健全運営と着実な発展を見せ、毎年グリークラブの演奏会やゴルフコンペを開催している支部であるが、その「成功」の裏側には地道な努力があった。地域の卒業生は二二〇〇人というデータがあった。それをもとに直接すべてを訪問し実質は約一八八〇名であることを確認したという。その生きたデータをもとにポスティングをすることで、コンサートをはじめとする様々なイベントが、人と人を結び付ける有効な機会となっている。問題は高齢化。どうすれば若人、および女性層の参画を求めることが出来るのかが問題だという。ただ、この問題についても高槻・島本支部は積極的な対応策を実施し「平成会」を立ち上げている。

この会に対しオールドメンバーは資金的援助をするが、一切口を出さないという粋な計らいも。この会は五名の発起人のもと、現在元気よく継続されつつある。一方女性の会も同様に試行したが、会自体は盛り上がるものの音頭を取って継続してくれるという人物が現れていないとのこと。そこで様々な会において、女性メンバーに司会・乾杯の音頭などをお願いし、雰囲気を変える努力をしているという。

このような活発な支部であっても、各支部との意思疎通を希望しており、大阪支部によるリーダーシップが必要だと感じているようであった。

第二日（四月十九日）

八尾支部



八尾支部長
林　　豊 氏

八尾支部長林豊氏に会う。支部の創立一九九四年。会員数は一二二名。年会費二〇〇〇円として、メンバーにはカレンダーを渡している。イベントとしては名所旧跡をめぐる遠足やゴルフ、あるいは市のマラソン大会に参加するといったコンテンツで、あとは秋には総会を開催しているとのことであった。

その他にも様々な親睦会を企画するなど、地域をベースとした結束力および運営には問題はないようであった。ただ地域的には中小企業が多く、また各事業所に関西学院大学の卒業生が少ないこともあって、企業単位での会員募集が難しいとのこと。そう言った意味では市役所の会員が多い。しかも半数が女性ということもあって、平成二十八年度以後は、市役所職員からの代表者に副支部長をしてもらうことにした。

八尾支部も若人、女性会員の参加をどのようにするべきかに苦慮している。地域的には古い感覚もあり、次男三男は土地を離れるというケースが多いことも足枷になっている気はする。とはいえグリークラブを招く、あるいは現状以上に新規のイベントを開催することは財政上難しいので、出来れば2～3の支部が合同で何か新たなイベントを開催してゆくことが出来ないかと希望しているとのこと。地域的な経緯はあるのだが、それを乗り越え、関西学院という分母で支部の合併を考えていかなければいけない時期にある……というのが林氏の意見であった。富田支部長としては「大阪支部を各支部から選ばれたメンバーで運営し、総合的なイベントを毎年するという方向もありうるのではないか」という意見を出したところ、林氏はそれも一案だと思うということであった。

北摂支部



北摂支部長
藤波　正之 氏

この支部は独自の「哲学」を形成している特異な存在であった。支部長藤波正之氏は「現役時代に縦社会で生きて来た者が大半なのだから、ここでは自由に好きなことをしていきたい。それを支部の是としている」と語った。

北摂支部は豊中・池田・箕面・豊能・能勢に居住する同窓生約八〇〇〇名を対象とした活動を行っている。しばらく休眠状態にあったが、再発足をして二十年。試行錯誤の中で「地域に応じた役割を果たしていかなくてはいけない」ということを実感し、冒頭の支柱にたどりついたという。その為、イベントのバリエーションも豊富で、ゴルフ会、ジャズを楽しむ会、能勢浄瑠璃鑑賞会、昭和の会、真田丸周辺散策の会、女性の会、多田銀山見学会などを実施。会費は年会費ではなく、イベントごとに徴収してゆく。情報の発信先は八〇〇名。そのうち五〇〇名への連絡がメールに移行でき、三〇〇名への連絡が郵送。この郵送費の捻出に苦慮しているとのこと。

呼びかけのコンセプトもユニークで、同窓生だけではなく、そのファミリーの参加を勧めている。狙いは「関学ファンを増やす」こと。総会やクリスマス会にはファミリー層の参加が増え目的は年々達成しつつあると実感しているそうだ。

ただ問題はやはり高齢化。ここの支部でも「平成会」を志向しているが、手ごたえはあるものの、その年齢層による自発的な継続が難しいようだ。

これまで話を伺った支部が「支部の連携」「大阪支部によるリーダーシップ」といったことに肯定的であったのに対し、この支部は「そういった縦型の組織参画は望んでいない。あくまでも自由で、やりたいことを自分たちの規模で楽しんでいきたい」とのことであった。

堺支部



堺支部長
井手口　満昭 氏

規模の大きな支部でありながら、ここも長年休眠状態にあったという。平成四年から平成二十一年の間、十五年以上のブランクを乗り越え復活を果たした。再興一回目の総会には一二〇名程度が参加したが、残念ながら年々規模は小さくなっている。最大の悩みは「仲間不足」。

勿論潜在的な「数」が少ないわけでは無い。在住の卒業生は約六〇〇〇人。企業で言えばクボタ、シャープ、池田泉州銀行などには多くのOBOGはいる。役所にも多い。しかし「現役世代の認識のなかで同窓会というものが変質しているのかもしれない」と支部長井手口満昭氏は述べる。総会やイベントに誘っても、若人がリピーターにならない。また女性に関して言えば、一度参加すれば「二度と参加したくない」と感じる人もいるようで、頭を悩ませている。役所のメンバーに意識を持ってもらおうと、市長による講演を企画したが、卒業生の参加は芳しくなかった。

そこで副支部長に平成十一年卒業の女性になっていただいた。新しい視点と感覚で今後の同窓会運営を刷新していければと思っているということであった。

第三日（四月二十五日）

吹田・摂津支部



吹田・摂津支部長
宮本　芳矩 氏

支部長宮本芳矩氏に会う。まず、支部の運営の難しさについて話された。「各支部は、誰もが思い浮かべるように、同窓が相互の親睦を深めると共に、関西学院同窓会（本部）と連携し、母校の発展に寄与することが大切なのだが、時を重ねて広がる一方の同窓の年齢差や同窓と学院の距離の変化をその時々でどう読み取るかに苦労がいる」という。

支部が出来て三十七年になる。結成はバブル期。少数のメンバーで結成することが出来た時代でもあった。しかし時の経過の中で結成当初のリーダーが抜け、運営の仕方に変化が必要となった。

同時に、同窓の間には年齢の差だけ、楽しみの多様性が広がった。例えばゴルフコンペ。三十人以上いた参加者が、いまや十人足らずに減少した。変わって歩こう会を作った。「子供を連れて行ってもいいですか」。「もちろんです」。同窓会の位置づけも変わってきている。

財政面でも同じだ。「プールしたお金は減らしたくない気持ちがあった。支部として使うものは、その都度支部の中で集めることにしていたので。このお金は母校に何かがあった時に使うものだと…。しかし、ここへきて必要な活動費は、支部が出すものだという声が強くなっている。これまでの思いが継承されるとは思えない」。でも「同窓会は心配しなくとも続きますよ。形や考え方は変わるでしょうが…」。事実、常任幹事には二十人ほどの平成卒組がいるし、総会運営には若い世代が汗を流してくれる。

宮本氏から大阪支部への提言としては「支部会員の構成を考えると、一つの支部という意識だけでやっていくことは難しいのでは。大阪市内に在住する人だけでなく、むしろその何十倍もいる同市に勤務する会員を考えるとき、各支部と同じようにやったのでは、あるべき『組織』の運営が出来ない。かといって、大阪支部のもとに各支部を統合するということは歓迎できない。同窓会本部と任務が重なる事にもなりかねないし、それは結局、他の支部を締め付け、弱体させることにもつながる。もっと、大阪支部としての独自性を活かしたあるべき姿を追求するべきではないだろうか」とのことだった。

関空支部



関空支部長
宮内　良雄 氏

「問題は女性離れ、若人離れ、高齢化です」支部長の宮内良雄氏は開口一番にそう言った。関空支部と名乗っているのだが、企業としての関西空港とは全く関係はない。泉州支部が分裂したなかで、幾つかの地域が合流してできたのだが、偏りのないニュートラルな名として「関空」を選んだのだとか。もともと泉州支部であった時代に中心的役割を担っていた岸和田や貝塚は目下どこにも属さず、また吸収されることも望んでいないのでエアポケットになっている。また富田林も休眠している。そんな地域的背景もあってエリア内の気持ちもトーンダウンしているような気がする。

地域内の卒業生は三〇〇人程度。そこに案内は送るが、郵送費もバカにならないので三回返事が来なかったらリストから削除することにしている。総会自体には毎回五〇名程度が参加してくれているが、この数字も減少方向にある。その他のイベントとしては新年会、春に関関同立でのゴルフ大会、秋に十五大学対抗ゴルフ大会など。その他に麻雀大会なども開催しているが、ここに若人や女性層が参加するということは望めないので、新機軸、例えば育児セミナーや平成会といったものを考えねばならないのだが…関空支部単独では財源がなく、また継続してくれる人も出てこない。

役員の構成にも無理があって、支部長経験者が二十五パーセント。残りは現役なので仕事を持っている。一緒に新機軸を考えるという状況が生みにくいとのこと。

とにかく若い人にもっと参加してほしいのだが、やはり現役世代は仕事が忙しくて難しいのと、もっと深刻な問題としては「地域への帰属意識を必要としていない」という傾向があるように思われる。

「こういった減少も一時にどっと減るような事態が起きれば、同窓会本部も危機感を持つきっかけになるのかもしれないが、徐々に減ってゆくので実感が湧かないのかもしれません」という宮内氏の言葉の中には、「同窓会活動の魅力とな何なのか。またどうしてそれが無くなったのか」という根本的な問題提起があるように思えた。

第四日（四月二十七日）

東大阪支部



東大阪支部長
上山　恒雄 氏

支部長の上山恒雄氏に会う。悩みは「支部長の引き受け手がない」ということ。自身幹事長を兼務して六年になる。このエリアの卒業生は二〇〇〇人。彼らに案内を三年間は送り、音沙汰がなければリストから外すということにしている。郵送費の負担を軽減するためだ。総会への参加者は六〇～八〇名。同窓会本部からの補助をいただいているが、結果としてはとんとん。とにかく総会のための人集めに苦労をしている。役所にも多くの卒業生が居るのだが、市民サービス的に四、五名ほどが参加しているに過ぎない。一度市長に講演をお願いしたこともあるのだが、参加する人数は変わらなかった。最近では八尾の林支部長とも「一緒に開催しないか」と相談をもちかけているという。

そもそもは大阪市、堺市に続いて三番目に大きな都市でもあり、卒業生も多いということで立ち上げた支部だが、うまくドライブできているとは感じていないようで、幹事の構成メンバーの高齢化も悩みの種。個人的な対策案としては、細かな自治会レベルにまで細分化し、地域幹事制を設け、とにかくポスティングの体制を充実させればと考えている。

女性への勧誘も課題だが、個人レベルでは少しずつ呼びかけをし、「あの人はまた来てくれるかな?」という感じではあるとのことであった。

枚方支部



枚方支部長
稲田　利二 氏

支部長の稲田利二氏に会う。非常に純度の高い支部であった。基本は母校愛。そこに郷土愛が加味されている組織だという。また仮に支部として成り立たなく

なっても、それは大きな問題ではないと考えている。

年会費は二〇〇〇円。もちろん高齢化は大きな問題だが「もう出られないけど、応援だけはしたい」という思いで年会費を収めてくださる会員も少なくないそうだ。エリア内の卒業生は約二〇〇〇人。案内は年一～二回の郵送。ただ最近は個人情報の問題もあって、アプローチしにくくなっている。直接訪問も労力がかかる割に効果がないので、口コミを重視している。数年前に案内に「今後も案内は必要ですか」というチェックボックスを設けたところ送付先は八〇〇に減少。今は更に減少傾向にあり七五〇程度。なかなか女性が参加しにくい状況にある。これればかりは進展以前に、方向性が見いだせていない。若年層の開拓については期待できる部分もある。というのもこの支部を生んだのが日本青年会議所とロータリーのメンバーがメインであり、その伝統は今でも生きているからだ。そして現在は北大阪商工会議所の青年部に関学会YEGが出来ている。後継者問題も含め、このYEGに期待している。

イベントとしては総会のほかに、年三回の幹事会、新年会、ゴルフコンペも年に三回行っている。ちなみに幹事メンバーの年齢は二〇代～八六歳。大半は六六歳より上。

支部の将来としては、規模を大きくしたいとは考えていない。個人の思いが反映する会としての継続を望んでいるが、最優先は母校に対する思いだとのことであった。

第五日（五月十六日）

松羽藤支部



松羽藤支部長
杉浦　敬久 氏

オーケストラOBとして大阪支部に、また船場関学会にも籍を置いていたのだが、リタイアすると今度は地域支部にもと引っ張られて現在にいたる――そう語るのは杉浦敬久氏。三つの地域を統合している支部でもあるので当初より各エリアから一人ずつ代理を出しそこにプラス杉浦氏という四人の体制で進めてきたがいずれも高齢。いざ次は？となるとこれがなかなか決まらない。

とにかく馴染みのないエリアの名前なので、愛着も生まれないことは事実。南大阪だとか大阪南部といった支部名にかえるべきではないかとも思うとのこと。ともあれ活性化のためにも年功序列を廃し、若い人にお願いすることが大事だと考え、先日副支部長を八十三歳の方から二十九歳の弁護士さんに交代していただいた。ただそれも若くすることが目的ではなく、画期的な企画を生み出すエネルギーになって欲しいという思いからの決断だった。

「とにかく地域の名前が真っ白なんだから、自由でユニークな発想が必要でしょう。どんどんプログラムを増やして広めてゆくべきだと思います。自慢できるものはどんどん自慢してゆくべきだ」と杉浦氏。実際に地域の特産を集め、オークションにかけたりしている。ワインや女性の好みそうなものも意識的に取り上げ、地産地消にもつなげてゆきたいとのこと。また最近では古墳のPRにも関与できないかと思考中。世界遺産に認定されれば行政からお金も出る……地域の同窓会活動が地域の活性化につながってゆく。これがあるべき姿ではないかとも。その実現には若い人の力が不可欠だと強調されていた。

また杉浦氏は同窓会本部との意識の乖離も実感している。地域支部が地域に寄与するのであれば、関西学院としての意思疎通は別組織が担わなければいけない。そのためには大阪支部を「大阪統括本部」として、そういった役割を担うべきではないかとも提案されていた。



寝屋川支部



寝屋川支部長
橋本　剛 氏

支部長橋本剛氏と会う。若人、女性どの支部もここに問題を感じているが、果たしてそれが支部の問題なのだろうか。学校本体が同窓会を必要と感じているのであれば、高等部以上の教育の中でその存在を知らせ、入らなければならないという意識を植え付ける努力をしてもらうべきではないかと考えていると力説した。案内状に「案内が要らない方はチェックボックスにチェックを」とつけて送ったところ、チェックを入れてくる人も少なくなかったという。こういった意識の部分まで支部が面倒を見ることはできないとの見解だ。

彼自身は「学校が好き」という思いと責任感から自主的に同窓会に参加したという。関東に居た時には神奈川支部に、そして大阪に戻って来て寝屋川支部に。年齢も若かったので先代の方々は大変喜んでくださったのだが、いざ自分がやってみるとなかなか難しい。イベントとしては総会をはじめ、異業種交流会の一貫で、ゲストスピーカーを設けてプチ講演会を開催している。総会は黒字だがそれでも財政的には厳しく、案内はポスティングを敢行し、講師にもお金がかからない形で交渉している。

目下の最大の問題は次の支部長探し。地域で事業をしている四十代の事業家が後継者として理想だと思うのだがうまくいっていない。そこで総会という厳めしい名をやめ「KGファミリーin寝屋川」としてみた。効果はまだ見えてはいないが、少しこの方向で続けてみたいとのことであった。また「慶応大学の同窓会組織として、各種の三田会があります。是非ともいろいろ研究して関西学院同窓会に水平展開して学ぶべきところを取り組むべきだ」と力説。

守口支部



守口支部長
糟谷　茂 氏

ここもユニークな支部であった。支部長糟谷茂氏によると総会を単なる同窓の集まりにするのではなく、キリスト教的な支援活動につなげていきたいとのこと。というのも声がけをして、一度は総会に顔を出すが、その後全く来ないというケースが多い。特に最近の若い人は知らない人との出会いより、知っている人と一緒にいたがるという傾向が強いように思う。そこで一昨年から総会を通して日本キリスト教海外医療協力会の「使用済み切手運動」に参加することにした。

システムとしては総会に参加した方に封筒を渡す。それに使用済み切手を集めて次の総会に持ってきてもらう。総会ではDVDを使用してこの活動の意味を参加者に伝える……というもの。小さいことかもしれないが、リピーターの無い総会はやりたくないので、何かを重ねてゆきたいとのこと。またこういった意図であれば地域の垣根を超え、枚方や門真といった近隣支部あるいは学校本体ともつながって行ける会になるのではないかとも思っている。しかし現状は郵送で地域の一〇〇〇名のみ。どのように発信するべきか悩んでいる。もし可能なら案内状は学校から送ってもらえるようにはならないだろうかとも訴えていた。

第六日（五月十七日）

いずみ支部



いずみ支部長
露口　六彦 氏

露口六彦支部長と会う。もともと泉州支部であったがそれが分離して出来た支部。泉大津市と和泉市と忠岡町が一緒になって創立した。泉州支部時代にリーダーシップをとっていたのは岸和田市であったが、そこで支部を引き継ぐという人が出て来ず、今は関空支部、いずみ支部、その他となっている。当時、泉州支部の財産も三分の一ずつ分割し、関空支部、いずみ支部がそれを得て、残りの三分の一が「その他のための保留」という状態。

このエリアの卒業生は約一三〇〇人程度。現在、世話をして頂けているのは五名程度。総会は毎回約一〇〇名に案内を出し、三〇名程度参加という状況。問題はやはり高齢化だという。現役世代は役所や銀行に多いということもあり、関学で泉大津市の若き南出市長を講師に招く等、苦心したがそれほど出席者を集められなかった。役所の現役世代に意見を聞いてみると「自分たちの世代がつながっても、結局上の世代が動いてくれない」と。

また別の問題としては昨今の「個人情報」に関する意識の差。二十代くらいになると、例えば確認の連絡をすれば「どうして知っているのですか！」と攻撃的な目で見られる。若い卒業生とは付き合いにくい部分がある。その点、体育会系の人間は若くても付き合いやすい。

一方で東京支部などは大変よくまとまっているように感じている。露口氏は自身の所属していたヨット部のOB会も同じで地方支部の方がよくまとまってい

るという。共通して言えることは「マイノリティーの意識」ではないかと。大阪府下では関学出身者は多いが結束力はいまいち。そのことが同窓会参加への意識を弱いものにしているのかもしれないとも。

ヨット部OB会のことを考えると「楽しいクラブライフ」と「現役の支援」はOB会の役目だが、強靭な学生を生み出すには学校の側の理解や協力がより必要ではないか。現役が強くなれば、OBも出てくるし寄付も集まり易くなる。同窓会も同じで、仕事を持ちながら同窓会の支部運営するのは大変難しいが、協力して頂ける同窓の組織化をすることが大切だと感じている。魅力のある企画をして、楽しかった、また行ってみたい、或いは自らも参画したいと思える様な企画をしようとすれば一部の限られた人達だけでは無理だ。そういったことから同窓会本部の支部に対する金銭的或いは情報の提供がより一層重要だと感じている——と強調していた。

第七日（五月十九日）

大東支部



大東支部長
平松　敬康 氏

支部長になって一年目という平松敬康氏。「事務局の石見さんのご尽力で回っています」と頭をかいておられたが、地域の意識という点で抱えている問題は大きいようだ。

地域の卒業生は三〇〇名程で、総会には三〇名程度の参加。そのうち大東の人間は二〇名もいないとのこと。またその殆どが五十代以上。そこで若い人のための場を生み出すためにも懇親会をはじめている。また市内のホールを利用してみてはという意見もある。地域支部として市の役に立つことをするべきだということで、年末に住道の駅前でやっているキャンドルナイトにも参加してみた。キャンドルで関学を表現する事で、地域へのPRも卒業生の仲間意識も醸成できるのでは……ということだったが、残念ながら役所の卒業生は殆ど参加しなかった。でも、まだやり始めたばかりなので、これ以外にも市のイベントと結び付けたことをやってみたいとも思っている、とのことであった。

ただ平松氏が一番問題視していることは「アイデンティティ—って本当にあるのか?」という点であった。「久々に大学に行けば、知らない建物が沢山あることに驚かされる。二十代の卒業生と六十代の人間が『母校』と言いつつも、何を共有していると言えるのだろうか」——そこで平松氏は、共通のものがないのなら、一緒に作ろうという発想で、学校ツアーを企画した。新しい校舎を見学しつつ半日を過ごしたところ、それぞれに持っている「あの時」を思い出し、大いに話に花が咲いた。同時に今の関学を共有出来たという。

支部と言えば総会——これが大前提となっていることにも疑問はあるとのこと。その人集めに終始するような支部活動に、本当の意味があるのかも考え直すべきではないかとも。

門真支部



門真支部長
竹内　春樹 氏

竹内春樹支部長と会う。長年支部長をしているが、なかなか代替わりできないというのが大きな悩み。どこの支部とも同様にメンバーの減少、高齢化、若い人・女性が定着しないという問題を抱えている。他支部との総会の合同開催も試みたが、結局各支部の顔なじみ同士が固まり、交流の目的は今一つで、中には「合同開催には二度と出席しない」という人も。

地域の卒業生は二〇〇名程度。四、五年をかけて直接訪問し確認をした。新卒者にも声がけをして招いているが、女性は三回がマックスで、大半は一回だけで来なくなる。会場では意外な出会いもあって盛り上がっているようだが……。「良きにつけ悪しきにつけ、関学の学生はボンボンなんやと思いますよ。好き嫌いをはっきり言うんで」と笑いながら話す支部長だが、小さな支部の将来、その継続の必然性については相当深刻に悩んでいた。

「支部を統合しても、辞める人間がそこそこ多いと思うので結局は規模は同じになるでしょう。要は人材と企画力だと思います。統合すれば多元的な視点を取り入れる可能性が大きくなるように思います。子育てやビジネスの講習会等の設営も、違った次元での話し合いが出来るのではないかと」——何もしない。意見も出ないと言う状況よりはましだとのこと。そんな中で門真支部が独自でやっている面白い活動がある。それが関西学院初等部五年生の生徒さんと一緒に行なっている田植え実習の支援である。これは地域の農家の方と支部が協力して毎年行っているものだが、すっかり定着している。「学校と同窓会が一体となった事業」の好例と言える。

第八日（五月二十四日）

河内長野支部



河内長野支部長
古川　創一 氏



西條　和彦 氏

支部長古川創一氏および西條和彦氏に会う。「お祭りをすれば人が集まると考えるのは間違っている。数年前のUSJの成功も要因は安く入れるからということであり、決してお祭りの効果であるとは思えない」開口一番西條氏から出たのはそんな言葉であった。同窓会が進めているフェスタへの疑問である。

地域支部はどこでも人集めに苦労している。若人、女性……しかしそれは催し物ではなく、いかに人材を得るかであり、それを獲得するのも人としての思いやり、心遣いがベースになると西條氏は言う。

地域の関西学院卒業生は一二〇〇名程度。河内長野と銘打っているが、実際はそこに狭山、富田林、千早赤阪なども含まれている。河内長野近隣を直接訪問し調査したが、三分の一くらいは居なかった。またそこには土着の人と、ニュータウン在住の人との意識の差があって、ニュータウンの人々は訪問してきた人間を「訳の分からない人」と感じるケースも多い。

年間のイベントとしては総会のほかに新年会や、ホタルを見ながらの交流会などが定例化。その他にKGサロンというタイトルで昼食会を行っている。また秋のレクレーションも行い、九度山や伊賀上野などを旅行している。総会への参加者は八〇名程度。方向としてはメインを次世代におき、司会も女性にお願いしている。形だけではなく、実際に女性層を引っ張って来てくれそうな人にお願いをし、そういった人が定着しつつある。

「決め手は人。そして心遣い」——西條氏の思いは支部長古川氏を主体に支部全体のフィロソフィーとして根付き始めているようである。



大阪支部支部長と編集グループによる総括――セカンドオピニオンとしての同窓会

①「思い込み」の問題

府下の各支部が抱えている問題の中で大きなウエイトを占めているのは後継者および女性会員の獲得という点であった。この両者はよく似ているようで違う問題でもある。

まず前者について。「若者は一度は来るが二度目は来ない」と異口同音に訴える。支部に持ち帰り主だったメンバーになぜかと問うたところSNSの影響が大きいという見解に行きつく。Facebookや LINE、Instagram、Twitter、Linkedin のほか名刺アプリ Eight や SMS などを含めると、スマートフォンの中で多くの人が複数の会合を日々開催していると言って良い。その傾向は当然若年層の方が顕著で、最近のビジネスシーンでは「いきなり電話をかける」ということが「失礼」であるという認識も定着しているそうだ。相手の時間に強制的に割り込む――それが良くないという発想である。かつては「電話できちっとご挨拶もしていないのに、いきなりメールを送るなんて不躾じゃないか」と言われていたことを思うと、コミュニケーションに対する根本的な発想の変化があることを高齢者層も理解しなければいけない。

そこからシミュレーションすれば、若者が一度総会に顔を出すと、そこで大半の「常連」や、その会に参加した年齢の近い面々と知り合いになる。名刺交換をすればスマホのアプリに取り込む。必要であればその中の数名と連絡を取り合う。年齢が近ければ LINE や Facebook でつながる。以後は自分たちで勝手に会うのでわざわざ同窓会に顔を出すこともない。会費を払って効率の悪い「出会いの会」に何度も顔を出す必要はないということになる。

では女性に関してはどうだろう。これは個人的な感想だが、そもそも「女性」というカテゴリーを特別に設けること自体に違和感を覚える。もちろん現役の学生数は女性が過半数を占めている。それを考えれば同窓会に女性が参加しにくいという状況は深刻な問題なのかもしれない。ただ、だからと言って殊更それを意識し、「女性対象のセミナーの開催」といったことを準備しても「解決」にはならないだろう。なぜならそれを企画するのが「女性」を勝手に想定した男性の目線であるからだ。実はこれは「若年層」というカテゴリーを設ける点でも同じであり、現状に問題があるというよりは、むしろこういった勝手な思い込みが今日「一般的」であることに問題があると言えるのではないだろうか。

例えばこれはとある行政の担当者の講演。ある都市が人口の減少問題の改善のために目標を打ち立てた。それは若者への移住の呼び込みであった。着手したのは街の景観の改善やフリースペースの充実。あるいはアートの発表の場を設ける。いずれも箱と場を提供するという行政らしい品ぞろえである。SNSも意識し、新しい街のロゴを海浜に設け、そこで写真を撮って Instagram に投稿してもらうという仕掛けも作った。確かに Instagram の投稿数や反応する人間の数は増えた。しかし根本的な移住にはつながっていない。広報力の弱さがその敗因と考え、目下そこに力を入れている――のだそうだ。

この話を聞いて「ああ、いずれ若者がこぞってこの街に来る」と本気で信じる人間がどれほどいるだろう。しかし構造的に「若者を」「女性を」と意識して試行錯誤している同窓会の活動に似てはいないだろうか。若者や女性のニーズということを考えるのもいいが、果たしてその想念の中にはあるはずの「若者」「女性」なる生き物が、現実社会に生息しているのかどうかを再考するべきなのではないだろうか。同窓会の問題であるように見えて、これはもっと広い問題だと考えて良いように思う。

②大学と投資志向

若者に同窓会への参加を呼び掛けると「どんなメリットがあるのですか」という声が聞こえる。「そんなものがあるか！」と内心苛立ちを覚えつつ、その感覚の違いにどうしたらいいのか答えが出ない。そんなケースが多いように思う。

冷静に考えてみればその答えは出てくるのではないだろうか。まず支部長や幹事をしている人の年齢層を六十～七十代だとした場合、新卒業生は「孫」の世代か、子供と孫の間の世代に相当する。例えば七十代と四十代では生まれた時の「原風景」が全く違うはずだ。カラーテレビやエアコン、マイカーなどの存在は言うまでもなく、資源や政治思想、社会機構などにも大きなギャップがある。そして四十代と二十代の間にも同様のギャップが介在している。ただその差異のベクトルは単一方向でモノづくりが過熱し、そして離れて行った――金融市場が経済の主になったと言えるこの時代において、大事なことは「育てる」よりも「うまく投資する」という意識が強い。企業でも投資家が最も大切であり、その利益を守るためには社員、顧客の信頼を多少犠牲にしてもよいという発想が生まれ、中には純利益以上に投資家に出資する企業も少なくない。この発想は当然企業から家庭へと流れてゆく。

教育に対しても投資的意識の影響は深刻で、一九九〇年代では「同じお金を払うなら、学校より偏差値をあげてくれる予備校の方がいい」――そこから始まり、目下は「お金を払ってるんだから、もっとちゃんと教えろ！」などという見当はずれのクレームを学校の教師にぶつけたり、「給食は要らないからお金は払わない」とか……。大学進学も「短期の投資」と考えている人も少なくないのではないだろうか。「この大学に投資し、息子・娘により良い就職先を与える」。結果として大学は実学が幅を利かし、そもそもの「ああだこうだと考える」という学問の楽しみから離れつつある。そんな環境で卒業した学生にしてみれば「大学という短期投資は就職で終了している。同窓会？さらに投資を追加することで何かメリットが？」。もちろんこの冊子も公的なものの部類に入るので、本来であれば「人の考えは色々あるので甲乙はつけられないが」と書くべきなのだが、やはり本音を言えばこんな学び舎の環境は堕落と言わざるを得ない。何をもってそう言い切るのか――ほかの大学ならいざ知らず、関西学院大学にはスクールモットーがある。「何のメリットが？」そんなことを口にした段階で学院の学生としては全くの落第ではないのか。そしてそんな学生を年々輩出している今の大学自体が、一番間違っているのである。

では、その劣悪な環境における同窓会の使命とは何か。それは果たして寄付文化なのか。問題のある「工場」に更なる資金援助をすることが、本当に同窓会の役割なのだろうか。

③同窓会の役割

同窓会の役割は時代によって変化するものであろう。先述のように今の問題は若年層とのギャップにある。しかもそのギャップの根幹には「投資」の感覚ある。大学の本質から考えればふさわしくない感覚だ。そこにギャップを感じる同窓会は抑止力として働くべきだ。

しかし今は機能していない。総会を開催する。メンバーの獲得をする……もちろん母校のためという意識から皆ボランティアでそうしている。そして寄付をしよう、フェスタをしようと声を張り上げている。果たしてそんな浮かれ騒ぎに興じていていいのだろうか。しかも財政的に疲弊しながら。

まるで医者不在の集中治療室で親戚が集まって酒盛りをしつつ、葬儀の募金をしているような光景ではないのか。大学がファーストオピニオンであれば、同窓会はセカンドオピニオンでありたい。そのための計画と鍛錬が至急の課題。守るべきは関西学院の質的見直しだ。

ではそれを具体的にどうするのか。まず今の同窓会にそういった力がないのは、活動の規模や体力――総合力が欠如しているからではないだろうか。となると「統合」を考えやすい。府下の支部にも「統合」を試みての失敗や、実際に統合をしても地域意識が邪魔しているというケースは多い。しかしそれらの「統合」は目指すところが総会にある。目標をもっと大きくセカンドオピニオンの養成にまで高めれば、話は違ってくるのではないか。つまりあくまでも「知」の集合体を創るということである。意見は多ければ多いほどよい。地域性も幅広ければ幅広いほどよい。人の顔色を見ず、それぞれが現役学生同様に自由闊達な意見を述べあう。別につまらない話でもいい。そもそも大学は「役に立たないことを考える」場であったはず。その本義さながらのサロンを府下支部の総力で形成する。条件は皆同じ大学のスクールモットーで学んだという一点で十分だ。権威なんて必要がない分自由に話が出来る。

そしてそこで生まれた話をどんどんSNSを使って配信する。若者が総会に来ないのなら、魅力的なSNSを構築すればいい。在学中からそこに参加したがる学生が出ればしめたものだ。その努力のために大阪が一つになればと思う。

と、ここまで考えてくると自然に大阪支部の役割も見えてくるように思う。大阪支部は同窓会がセカンドオピニオンを生み出す機関となるべく、各支部の交流の場を準備し、また同時に各支部の抱える問題の解決にも尽力するハブとなるべきではないのか。その運営は各府下支部より選出された代表者を中心に、大阪支部幹事、同窓会本部の代表者によって行われる。大阪支部ではホームページもつくり、インタビューなどを中心にセカンドオピニオンの種をまきつつある。今はまだほんの思いつきのレベルかもしれないが、将来この考えが継承され「関西学院・同窓会学派」などと呼ばれるものが生まれることを夢見たい。

「母校通信記事から見えること」

大阪支部創立四十周年の記念誌に母校通信の記事を転載しているコーナーがあった。それに倣い七十周年記念誌でも昭和六十二年から現在までの母校通信記事を調べてみることにした。調べていくうちに面白いことが見えてきた。ここではそれをレポートしておきたい。

まず顕著な特徴は、昭和六十二年以降母校通信に掲載されている大阪支部の記事が、会の規模と比較しても大変少ないということだ。母校通信の支部活動の記事は基本各支部からの寄稿で成り立っているので、結果として「書く人が少なくなった」ということなのかもしれない。

府下支部の訪問記を参照していただければ良いのだが、目下活動している府下支部は大阪支部を除くと十六存在している。そのいずれもが四十周年以後に発足している。それは地域支部の発展である一方、大阪支部としては力の分散でもあったろう。記事が少なくなるというところに、力の分散の実態を見るような気がする。しかし記事の減少は急激ではなく、段階を踏んでいる。大きくは三つの段階に分けることが出来る。

掲載内容について

第一期（昭和六十二年～平成八年）

この期間の母校通信には毎年大阪支部の記事はある。内容はすべて総会について。執筆者は下村興安氏（第二十一代支部長）。この当時は総会が全て年末に行われ、忘年会的な要素が強かったことが伺われる。アトラクションは今よりもバラエティーに富み、グリークラブの合唱やフラメンコダンス、交響楽団による演奏、軽音などを招いており、その盛会ぶりが伝わってくる。アトラクションの内容が幅広いということは、現役生との交流も幅が広かったと推測できる。同窓会と現役生が当時は今よりもずっと太い信頼関係を持っていたこと。また同窓会としてそういった関係を構築する努力を、自然な形で行っていたということであろう。

第二期（平成九年～平成十七年）

ここから記事に変化が出てくる。総会の記事を投稿していない。かわって登場するのが大阪支部ＯＧクラブの記事である。このクラブの例会の報告記事は平成七年から登場している。「第24回例会」と記されているが、記事によれば前年までの「ＫＧ大阪シオン会」が改まり、ＯＧ会となったとある。例会の構成としては花外楼の食事などを楽しみ、毎回ゲストスピーカーから学ぶというもの。内容も井上千明「寿命は変えられる」、小山章松「未野興産社長刑事手続きについて」、王振蓉「私の双眼鏡人生」など政治、経済、法律、文化、生活の多岐にわたっている。

会場も大阪市内から徐々に変化してゆき、関学会館ベーツチャペル、三田キャンパス、山陰の美術館と庭園のツアー、京料理「桜田」、信州蓼科、岡山探訪へと発展。ゲストに大阪支部あるいは府下支部の支部長・事務局長などが招かれている。

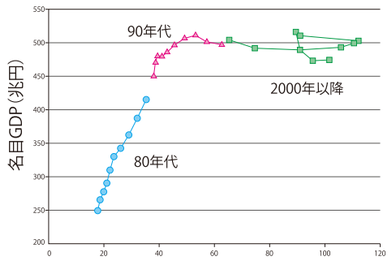
第三期（平成十九年～現在）

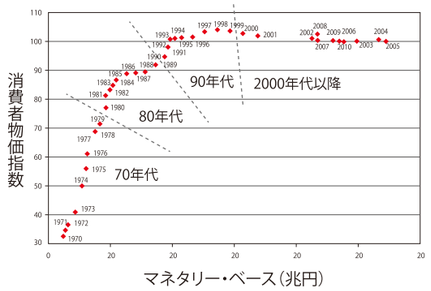
平成十八にはＯＧクラブの記事は無く、以後も投稿はない。代わって再び大阪支部としての記事が登場する。平成十九年は前年度の総会記事とともに五月に開催された「渡辺貞夫 in K・G２００７」と題された音楽イベント。そして平成二十二年に開催された「関学ＯＢ花形落語会と鼎談」。以後大阪支部の記事は無い（調査は平成二十九年七月）。

社会的背景について

三つの時期を俯瞰するとそれぞれ約一〇年のスパンに分かれていることが分かる。最初の一〇年。大阪府下の主だった支部はこの時期に発足している。バブル経済期から崩壊、そして阪神大震災までの時期に相当する。右肩上がりに成長すると思われていた時代、大阪でも咲州・夢洲などの開発、夢工場や花博といったイベント、オリンピック誘致への試み、関空の開港――など「地域の発展」が夢見られた時代だ。しかしその一方で不気味な数字が動いていた時代でもある。二つのグラフを見ていただきたい。これは経済学者・小野善康氏の提示されたグラフであるが平成四年（一九九二年）を境に、お金の量が増えても人が買い物をしなくなっていることが見て取れる。つまりこの時期に実体経済と金融が乖離し始めていたということになる。

■経済学者・小野善康氏の提示されたグラフ





バブルが崩壊し、リアルな人と人、人とモノとの関係が見直されてゆく中で経済のメインステージは「無駄」の少ない仮想空間に移行してゆく。皮肉なことに地震がきっかけとなってインターネット、携帯電話が急速に普及してゆき、徐々に顔の見えない関係が構築されてゆく。当然「実体」的な人間の関係である同窓会も変質を余儀なくされていった。バブル期に発展すると思われた府下支部も思ったようには成長せず、大きな負担を各地に残し、また大阪支部本体は空洞化してゆく。それが現実として具現化するまでの一〇年、それがこの時期だと思われる。

総会でもうかがわれる現役大学生とＯＢとの関係の深さは、現同窓会が「無くしてしまった要素」であるが、発展から変質へという過渡期の現象として大変興味深い点であると思われる。

女性の時代という幻想

続く第二期は明らかに女性がテーマとなる。バブル後の低成長期。リストラや就職難に男性は苦しむ。完全失業率も高度経済成長期から一九七〇年代までは一％前後で推移していたが、八〇年代には二％台、九〇年代で四％台、二〇〇〇年代は五％台まで上昇している。

一方で女性の社会進出が「進んだ」時期でもある。法も一九八五年の「男女雇用機会均等法」から一九九二年「育児休業法」へと整備が進んだ時代でもある。

結果共働きの率も一九八〇年には、男性世帯雇用者と無業の妻からなる世帯が、雇用者の共働き世帯の二倍であったのが、一九九〇年代には雇用者の共働き世帯が上回ることに。

これが少子化にさらなる拍車をかける結果となるわけだが、当時は「女性の時代」



を強く意識する時代であったと言えるだろう。大阪支部は「職場」でつながる要素が強いので、この潮流は顕著に現れている。もちろん当時を振り返り「だれそれという個性的なメンバーがいて改革をした…」という話も残っているだろうが、時代を俯瞰すれば男が減退し、女性にエールが送られた時代を象徴していることだと思われる。

ただこれも十年というスパンの中で収束してゆく。女性会員の意思疎通に問題が生じた——という話も聞くが、もし仮に「女性の社会進出」という流れが、本質的に問題のないものであれば、組織は継承されていったのではないかという気がする。あくまでも余談ではあるが、当時の論調に少し気がかりな点がある。当時の論調——「日本の女性の社会進出は進んだとはいえ、米国と比較すればまだまだ遅れている」と発言する人が多かったように思う。では「お手本」とされたアメリカの女性の社会進出とは何であったのだろうか。その本質はレーガンの時代八〇年代にはじまる。「会社が利益を出すためには、労働者への給与を抑えることが最も確実な道だ」という風潮が強まった。給与が抑えられると教育費や医療費が相対的に高くなるので共働きが増えていった。これが真相でウーマンリブの伝統や日本の男女共同参画の唱える思想的な背景よりも、組織的利益追求の結果、女性を労働の現場に引っ張り出すことになったと内閣参与・原丈人氏は論じている。彼はまたウォールストリートから女性の運動家に活動資金が提供されていたとも言っている。日本も男女雇用機会均等法の成立時期から見て、アメリカの流れに追随した色があることは否定できない。人工的な風潮に違和感を覚え、自然にこの流れは消滅していったのでは無いだろうか。

その後のアメリカは共働きをしても医療費や教育費の方が伸び率が高いので、残業を推奨し、それでも賄えないとなると借金を推奨してゆく。その結果リーマンショックを迎えることになる。奇妙なことにOGクラブの活動が消滅するのも、時期を同じくしている。

過去への憧れ？

第三期は同窓会の再興から始まったように思われる。しかしすでに現役生、若年層との乖離は深刻化しており、思ったように運営できない。しかもスマートフォンの登場で職域支部でのリアルな会合に魅力を感じる人間は少数派となってしまった。

何とか会合に魅力を持たせようと各種のイベントを開催するも、その結果も得られずベクトルも見いだせない。収支も赤字になるケースが多く、継続が難しい。よって記事も極めて少なくなる……といったところだろうか。

四十周年の記念誌を見て、今一度考え直そうとするこの記念誌の編集動機も同じ分母の上にあると言っても良いだろう。四十周年誌における母校通信を見直す記事をもとにスタートした調査だが、そこから見えることは今大阪支部が立っている「場」には二つの課題があるということだ。一つは過去を思い切る決断。かつての同窓会という組織はその存在を必要とされていないということ。そしてもう一つは時代を読み取る「体力」の養成。第二期に見られた社会風潮への付和雷同が、本来築かれるべき過去から構築を崩してしまったということ。流されることなく、本質を今一度確認し、破壊ではなく、建設的な発展をあきらめずに思考すること。これらが今共有し、そして将来に対しても伝えるべき「教訓」だと思われる。



池田泉州銀行　弦月会

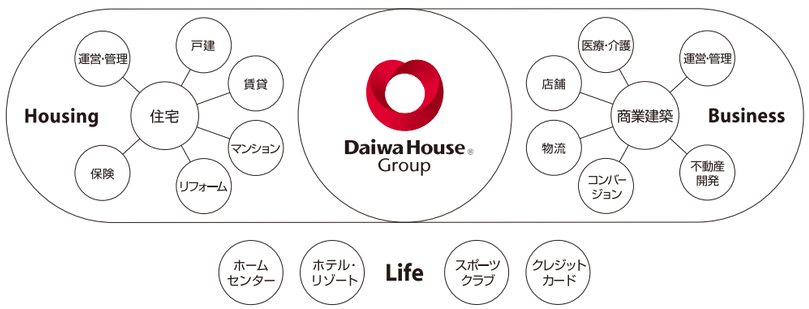
池田泉州銀行
SIHD
大阪府大阪市北区茶屋町18-14　http://www.sihd-bk.jp

Daiwa House®
大和ハウスグループ

共に創る。共に生きる。

大和ハウスグループは、
グループシンボル「エンドレスハート」に
お客様と私たちの永遠の絆と
私たちグループの連帯感を託しました。
人・街・暮らしの価値共創グループとして、
私たちは社会に新しい価値を築いてまいります。

人・街・暮らしの価値共創グループ



大和ハウス工業株式会社
www.daiwahouse.com

「私と関西学院同窓会大阪支部」

中嶋　直躬（第22代関西学院同窓会大阪支部長）



私と関西学院同窓会大阪支部との関りは、昭和28年に関西学院大学　経済学部を卒業して、㈱コクヨに入社しており、その関係で大阪市中央区で手広く文具専門用品の経営を展開されておられた昭和16年商経学部卒業の布谷武治先輩が声をかけて下さり同窓会大阪支部に入会させていただいたのが同窓会活動のはじまりです。営業をしている時に文具屋の先輩に勧誘されたのが始まりです。

その時大阪支部に入会して支部の組織についてその実態を知り驚かされました。地区別でなく企業別、体育会別に構成されていました。声をかけていただいた布谷先輩はアメリカンフットボール部の大先輩でして、私はアメリカンフットボールとは関係がなかったのですがアメリカンフットボールの班の所属となり先輩と行動を共にして先輩に言われるままに、同窓会大阪支部の手伝いをしておりました。又、この班は非常に家族的な班で布谷先輩の奥様にも大変可愛がっていただきました。その後、㈱コクヨの専務になった時に、当時　支部長をされていた下村先輩（第21代　関西学院同窓会大阪支部長）に「次の支部長を引き受けて欲しい。」と頼まれ、58歳で第22代関西学院同窓会大阪支部　支部長になりました。28年前ですので、平成の最初の支部長になります。

関西学院同窓会大阪支部の組織は地域別班になっていて大阪支部を支えていると思っていましたが、実態は体育会系の班や、卒業生が在籍している企業に班があり、大阪支部を支えていました。それぞれの企業の班に幹事役員が居て、例えば支部総会のチケットの販売を企業の幹事役員に10枚単位で引き受けて貰い、また広告協賛の依頼にしても企業の幹事役員が引き受けてくれました。支部を預かる責任者としては、多少の苦労はありましたが、私の支部長時代は円滑な支部運営ができた時代だったと思います。年間１００万円くらいの余剰金を繰り越していました。

しかし、その後　世相は景気低迷の時代が続き、各企業の経費節約で企業単位での総会チケット販売、広告掲載が難しくなりました。結果、恩知（第23代関西学院同窓会大阪支部長）さんの時代になり、企業各班の幹事役員が居なくなるのと同時に、総会チケットを企業の幹事役員がまとめメンバーに渡す事も無くなり、各班の個人にチケット販売をお願いすることが多くなってきました。

「人が多い上、食べ物が少ないので、チケットが売れない。チケットが返却できない」との不満が出てきたのと、企業班からの大阪支部活動のボランティアが少なくなった為、「チケットの返却を認める」などをして支部の改革を進めましたが、チケットの販売は増えない上に経費は上がり　スポーツ班がスケート班を除いて脱会し、その上　企業班も昔の様な集客力がなくなり、大阪支部の活動と財政を逼迫させる事になりました。

もう一つ印象に残る支部長時代の思い出は、「府下支部長会」が初めて開催できた事です。

当時の府下の支部は今よりも少なく、各支部長を個別には知っていましたが、面識はあるものも一堂に集まっての話し合い機会がなく、支部活動についての話し合いをする事もありませんでした。結果、府下支部を集める事が出来て、休眠している支部を復活させる事が出来、その後、数多くの支部を作ることが出来ました。

同窓会本部との関りに付いて

当時　同窓会本部は活動を「会長が一人で全てをこなす。」時代の名残で、会長が一人で東奔西走されていたのを見て、学院同窓会本部としてもう少し組織化しなくてはと考えました。ちょうど第16代大阪支部長をされた木村さんが本部同窓会会長になられ、私が大阪支部長になったのを契機に同窓会本部の組織を見直し、同窓会本部の活動に参加して副会長制を創り、同窓会本部の副会長として木村会長をサポートして、理事になり、80歳の定年まで本部役員を務めさせて頂き、同窓会を6年前に卒業致しました。

時代も大きく変わり、同窓生の数も年々増加していくに大阪支部の運営は益々難しいと思いますが、大阪支部の皆さんの英知を集めて、この伝統ある関西学院同窓会大阪支部の更なる発展を祈念申し上げます。

「世相と同窓会活動」

恩知　四郎（第23代関西学院同窓会大阪支部長）



新阪急ホテル二階の大広間、あふれた人がロビーでウヨウヨ、会場の中は正面に舞台、中央三か所に大きなテーブル、上に料理が並んでいる。舞台の反対側には寿司、天ぷら、ラーメン等の屋台が出ている。舞台上ではテレビなどの電化用品、スポーツ用品や食料品、文房具、ホテルやレストランの宿泊食事券等々、たくさんの品々の大抽選会が行われている。が、見えるのは、人また人の頭。７００人から８００人の人達全員に何かが当たる、その熱気の凄さは大変なものです。舞台の上方を見ると関西学院同窓会大阪支部総会の文字……

そのころ大阪市行政では市内の工場や学校を「やかましい！」と言って市内から郊外へ追い出していました。するとスモッグ問題もあり、住民までもが郊外に出ていくドーナツ化現象が起こり、市内の小売卸商店は閉店シャッター街となりました。一方、同窓会も大阪支部で役員として活躍しておられた人が近隣支部代表（府下に15の支部誕生）という来賓に変わられて出席されるようになりました。

大阪支部の活動内容は役員中心の努力であまり変わりませんが、さすがに総会参加者の人数は少なくなりました。それでも４００人超の人達、特に地域にお勤めの人が中心となって、市内在住の方は少し少なくなりましたが、お集まりになります。しかし今、大阪市は市内人口が増加して回帰現象が起こっています。中高年の人が多いようですが、女性が多くなることは喜ばしいことです。今年大阪支部は70周年を迎えられ記念総会が催されます。

新しい変化を楽しみにしています。

YUASA M&B



ENVIRONMENT 環境
ENERGY エネルギー
ELDER 高齢社会
EDUCATION 教育
ENTERTAINMENT おもてなし

ユアサＭ＆Ｂは、様々な企業とコラボレーションを行い
「脱石油社会」「低炭素社会」の実現を目指します！
また、産・官・学の垣根を越え、手を取り合って本当の
青空と星空を復活させるために全力を尽くします。

YUASA
ユアサM&B株式会社
本　　社：〒530-6127　大阪市北区中之島３丁目３番２３号
中之島ダイビル２７F
TEL 06-6443-0111（代表）　FAX 06-6443-0116
東京支社：〒104-0031　東京都中央区京橋１丁目１番１号
八重洲ダイビル５F
TEL 03-3276-0101（代表）　FAX 03-3276-0103
ユアサＭ＆Ｂ　検索

「大阪支部四十周年記念誌から考えたこと」

大阪支部創立七十周年記念誌を作成するきっかけとなったのは、三十年前に発行された「関西学院同窓会大阪支部四十年の歩み」。冊子自体は関係者からの寄稿と「母校通信」掲載記事の転載で構成され、あとは広告ページが続くというシンプルなものだ。ただそこに綴られている内容は現代人の心をも揺さぶる「生の声」である。

「おう、お前生きていたのか」終戦直後の同窓会ではお互いに知った顔が出会うと、まずはこう挨拶したそうである。生き残った者同士が消息を確かめ合う場としての同窓会。戦場で会い、思わず抱き合った同窓生が、もう戦死していたことをそこではじめて知る——そんな寄稿には思わず眼がしらが熱くなった。昭和二十二年当時、大阪も神戸もまだ八割が焼け野原。そこにバラックが建ち、街頭には住む家もなく、食料にも困っている人があふれていた。我々も教科書の中で幾度となく教えられた光景には違いないが、「先輩」からの言葉として読むと強烈なリアリティーを伴ったものになる。

同窓会再建のミーティングは梅田新道にあった「立山」という喫茶店であったのだとか。苦労の末ようやく昭和二十二年十二月二十日に大阪支部が立ち上がる。会場は朝日ビルにあった「アラスカ」であったという。そこで主要メンバーの一人朝長正男氏は「我らの時代来る」という熱弁をふるわれたそうだ。

その後の活動も今とは随分様子が違う。場所は戦争で焼けた文楽座の跡地や中央公会堂、堂ビルの地下食堂、あるいは阪急百貨店の八階食堂であった。物資がとぼしく、酒やビールも食卓には出なかった。

話しは変わるが、かつて河内長野のOB西條和彦氏からこんな話を聞いたことがある。彼は昭和二十年八月十四日の砲兵工廠の悲劇的な空襲を体験された。多くの友を失った。自分も生き残ったことが奇跡だった。体だけでなく、心もぼろぼろになった。その心の傷を癒したのは関西学院の先生であったという。



この西條氏の話と同窓会の再建の記録が、私の中でふと一つに結びつく。「命の重さ」というのだろうか。戦争は自然と人にそれを教えたのかもしれない。その結果、終戦直後の学校は戦争で傷ついた若人の心を癒し、同窓会は私費で知り合いの安否を確かめようとした。麗しき善意の両輪がうまく絡み合っていたとも言えよう。そのことにも改めて感銘を覚える。

しかし今回の七十周年記念誌でも語られているように、学校と同窓会の現状にそんな「心の両輪」はなく、経営、寄付、プライド、社会システム——様々な観点で両者は食い違っている。挙句の果てには新卒生が口をそろえて言う。「同窓会に何のメリットがあるのか?」と。

果たしてそんな貧しい心を育むために、戦争で先輩たちは死んでいったのか。現在のような関係を生むために、生き残った人たちは懸命に再建をしたのか。そして「命の重さ」に対する敬意よりも、自己のメリットを優先する後輩を仲間にするために、同窓会は頭を下げてゆくのか。

総会とは何なのか。浴びるようなビールが目の前に並んでいる。会費さえ払えば、自分には飲む資格があるものだ。多くの者はそう考えるだろう。心のリレーが消滅した場で、本当にそんな資格があるのだろうか。先人たちへの敬意。そういった「心の会」としての総会でなければ、それこそ集まる意味などない。

四十周年の記念誌には、さらに興味深い記述があった。

「現在、学内の意思統一を欠いた母校の現状に対して、まことに憂慮してやまない」。果たしてこの「統一」とは何のことなのか。文脈からもはっきりはしない。ただ、これを書いた先輩は、かつて大学にあった「ある心」が姿を消したと感じておられることは事実だ。

現代を「戦後」と捉える人はもはや少数派ではないかと思う。どこを探してもバラックも焼け野原もなく、傷痍軍人の姿もない。また「生きていたか?」は「元気にしていたか?」という意味の挨拶となり、同窓会も生きていることを確かめる場ではなくなった。

しかしこの一文は明らかに「戦後」の喪失から、更にまた何かを失ってしまったことを示している。敗戦後、必死の思いで再建した同窓会に集まった人たちは、今の我々に対して恐らく何らかの違和感を覚えるだろう。その違和感こそが「戦後」の「結果」であるとしたら。

経済復興し、生活が変化しようとも、その不気味な違和感が存在する限り、永遠に「戦後」は「戦後」いや厳密には「敗戦後」であり続けることには違いない。

先人は戦争に破れた。そして今また、明確に「心の質」の戦いに我々は敗戦しようとしているのではないか。総会の心——それを忘れ続けることで。

大阪支部のホームページ

平成二十七年に大阪支部はホームページを開きました。その目的とするところは同窓生同士の情報交換の場を提供することでした。SNSが発展する中でも、なかなかそういったシステムになじめない方も多く、高齢化の進む中でその現象は今後も絶えない問題だと思います。そんな方にとっても「あいつどうしてるんやろ?」、「近々同窓会のイベントってあるんやろか?」、「新しい仕事始めたよ」といった自分からの発信をしたいという思いは共通です。思いついたときにとにかくぶつける場所を生み出したい——そんな富田支部長の思いからスタートしたホームページです。

とは言え作る方も素人集団。試行錯誤の上、今の状態に落ち着いてきました。全体を貫くコンセプトは大阪支部独特の「シビックプライド」ではないですが、「大阪を育てたのは関学生だ」という想い。関西学院自体は阪神間にある学校ですが、卒業生の多くは大阪で働き、また大阪のビジネスマンに石を投げれば一人に一人ぶつかる(言い過ぎかもしれませんが)と言ってよいほど、同窓があふれています。学び舎から離れ、その精神を持ちつつ、大阪を日々育んでいる。そんな関学生の姿を、誇りをもって共有したいというページです。

メインコンテンツは大きく二つあります。一つはインタビュー。各界で活躍されている関学OBにお話を伺い、そこから様々な考えるヒントを学び取るというコーナーです。取材範囲も大阪が中心ですが、その他の地域にも広がりつつあります。またOBだけではなく、目下関西学院で展開している講義についても、先生へのインタビューという形でご紹介させていただいております。編集室長はNHK「くらしの笑百科」でも有名な弁護士の小島幸保さんです。

もう一つは「関学ひろば」です。ここは現段階では人材バンキングの状態で、登録していただいた方が名と職などをPRしている場所なのですが、実は先のストーリーがあります。ここにどんどん人が入ってくることで検索エンジンを設け、様々な情報交換の場に出来ればと考えています。例えば「旅行に行きたい」、「同窓生をさがしている」、「おいしい料理を食べたい」、「イベントを考えている」など、気安く同窓生に何かを相談したい時に、簡単に検索の出来るデータBOXに育てていきたいと考えています。

皆さんも是非、大阪支部のページをのぞいてみてください。検索は「関学同窓会大阪支部」です。

https://www.kwangaku-osaka.org





KG INTERVIEW

大和ハウス工業株式会社

代表取締役会長・CEO
樋口　武男氏

「企業は人なり」
――人を見ることの大切さ。

――まずはご自身の「原点」についてお尋ねしたいのですが？

樋口：22歳で卒業し、24歳で結婚し、子供が生まれる前の年に新聞の切り抜きをもって大和ハウス工業の門をたたいた…その前に勤めていたのは鉄鋼商社で、勤務は9時～5時、土曜は半ドンと大変恵まれた環境だったのですが、20歳の時に決意した「志」があったので、ここにじっとしている訳にはいかなかったんです。「志」というのは自分で会社を作り、その会社を上場会社にするということ。そして親孝行したい…これが僕の「原点」ですね。

　独立したいという思いは本当に強かった。大和ハウス工業に入って最初に赴任した先が堺工場でした。毎朝5時に出て帰宅が午前様。仕事は5時に終わるのですが、その後も独立するための勉強をしていました。鉄のことは分かりましたが、その他のことはゼロから勉強しなければいけなかったので。

　その思いの根源は、繰り返しになりますが「親孝行したい」という思いでした。私の父は技術系のサラリーマンで、真面目な人でした。父も母も4人の子供たちにひもじい思いをさせることなく、懸命に育ててくれていた。ある日、母が自分の着物を取り出して外に出かけるので、どこに行くのかと後をつけたんです。すると「質」と書かれたのれんをくぐっていった。それを見てから一切小遣いをもらったこともなく、色々なアルバイトをするように。その時に誓ったのが「絶対に会社をつくり、社長になって親孝行するんだ」ということだったんです。

――その原点である「志」をもって大和ハウス工業に入社された？

樋口：私が入社を希望した当時、大和ハウスは週刊誌などで「モーレツ会社」とか「不夜城」などと書かれていました。「こういったところで、しごいてもらえば、独立も早い」と考えたんです。そこで「歩合制セールス募集」と書かれた新聞広告を片手に門を叩きました。出てこられた人事課長に「歩合制セールスとありますが、来年には子供も出来るので、是非正規の社員として雇っていただきたい」と切り出したんです。かなり問答が続いたのですが、「自分はここで鍛えてほしい」とねばったら、人事課長も「確かにうちは奈良の材木屋から始まったから、木に詳しい人間は多い。でも鉄に関しては人材が乏しい。一度資材担当の専務に相談してみる。その上で専務が面接をすると言えばまた連絡しよう」ということになったんです。結局専務さんは会ってくださったのですが、その方が創業者石橋信夫さんの二つ違いの弟・茂夫さん（元副社長）だったんです。

　さて25歳で入社し、堺工場、大阪支店、大阪本社と「資材」で勤め次長になり、33歳の時に「住宅営業」の次長になったんです。住宅営業なんてやったこともないので、何も分からない――そこで管理部の課長か係長を呼んで、決裁書類をもとに一つずつ教えてもらった。また新入社員に「飛び込み」の営業をさせるのですが、それも自分は分からない。なので自分も行って「飛び込み」の営業を経験しました。中には扉を半分開けただけで「大和ハウス工業です」と言ったら、バタンと閉める人もいました。顔から火が出るほど恥ずかしかったのですが、何事も経験。それが無ければ自分の会社を作ることが出来ないと思っていたんです。そういったことを3年続けたあと、出来て間もない山口支店に支店長として赴任することになりました。

　支店といえども自分はそこの独立した社長になったつもりで、懸命に引っ張っていきたい――そんな気持ちが強く、支店の部下の5倍くらいは働いたと思います。ところが気が付くと誰も自分についてきていない…最初の半年で四面楚歌になっていたんです。

――その危機は解消されたのでしょうか？

樋口：ちょうどその頃に創業者石橋信夫オーナーが社長として山口に来られた。そこで社長をお連れして、知事、市長…と順番に要職の方を紹介していきました。その時のことで、大変記憶に残っていることがあります。当時山口支店の道路を挟んだ向かいに日本電信電話公社の山口支部がありました。そこの支部長と次長にも挨拶に行ったわけですが、挨拶を終えいざ帰ろうとすると社長は「ここはいつも大変お世話になっている。その窓口になっておられる方はどなただ？」と尋ねられる。「総務の課長・係長です」とお答えしたら、その人たちにも挨拶をしたいとおっしゃる。そして実際にその挨拶が、知事や市長に対するものと全く変わらない丁寧さで、いつまでも頭を下げておられる。私はその姿に強烈な印象を覚えました。

　事務所に戻って私は開口一番「本日は挨拶の仕方をトレーニングしていただいたのですね？」と尋ねました。ところが石橋オーナーはそれには何も答えない。



大和ハウス工業株式会社　代表取締役会長・CEO
樋口　武男（ひぐち・たけお）氏

「樋口君、支店長になったら忙しいやろ」、「よく役員が来よるやろ」、「来たら迎えに行かなあかんやろ」、「夕方になったら食事に付き合わなければいかんやろ」…ゼロから全部やって来られた方なので、手に取るように分かっておられる。そしてそんなやり取りをしている間に「悩んでるな」と気づかれる――しばらく話しているうちに「樋口君、飯を食おう」と仰って、オーナーの泊まっておられる「山水」という老舗の旅館に一緒に行ったんです。食事と言っても石橋オーナーも僕も酒を飲まないのですぐに終わってしまう。「風呂に入ろう」とおっしゃった。この時代だと「社長さんがお風呂をいただいた後に入る…」というのが常識だったのですが、オーナーは「一緒に入ろう」と強くおっしゃる。そこで一緒に入って背中を流したんです。そして湯船に浸かっておられる後ろから思い切って言ったんです。

　「支店長をやって、こんなに孤独になるとは思いませんでした。一生懸命やればやるほど、後ろを振り向くと誰も付いてきていない。四面楚歌の状態です…」次々と日々のことを申し上げました。社長はただじっと聞いていたのですが、ふと僕の話が途切れた時に振り向いてこうおっしゃった。

　「長たるものは決断が大事やで」――たった一言。風呂を出て私は家に帰り、朝方近くまでその言葉の言わんとしていることを考えました。そして一つの答えを出した。それが「一対一で、時間無制限に、全員と話をする」ということでした。山口支店のメンバー約70名に対してそれを実行しました。するとそれまで怖がって、食事に連れて行って「上がれよ！」って言っても直立不動であった連中が、腹を割ってお互いの考えを知り合うことで、翌年には一人当たりの売上高と利益高が社内全国1位になったんです。事業所のボーナスの評価は「S」。まあ、そこで分かったこと…「会社の仕事をする、それ自体は人間の能力の差ではない。要は本人がやる気になるかどうかだ。」ということですね。「やれ！」と言わなくても「自分で勝手にノルマを設定して頑張る…」そんな環境だからこその「全国1位」だったのだと思います。

――山口にはそのまま長くおられたのでしょうか？

樋口：山口で苦労した後、すぐに福岡支店が赤字なので、そちらに行って再建するようにと言われました。当時は38歳なので、支店に行くと管理職は皆年上ばかり。で、九州に行ってから一か月くらいしてからかな？九州ブロック全体の会議がありました。その時に石橋オーナーが来てくださって、ものすごく援護してくださったんです。それまで福岡の支店長はころころ変わっていたんですが、「今度の支店長が変わるようなことがあれば俺が許さん」とね。その後はやりやすかったですね。

　朝礼は8階建てのビルの屋上でした。事務所は2階。私は若かったので階段でざっと上るんです。でも年上の管理職は体操の時間ぎりぎりにエレベーターであがってくるんです。私はエレベーターの前で立っていて「階段で上がってこい！」といって彼らをもう一度おろしてね…（笑）。要は「気持ちを一つにしなければいけない」と考えていたからです。なぜ屋上で朝礼をするのか――小さい声で言っていたら風で飛んでしまって聞こえないでしょ。大きな声で元気よく話させたかった。というのも、支店にかかってくる電話を、みんななかなか取らなかったんです。赤字がずっと続いていたんで、皆気持ちが萎えてしまっていてね。で、3人ほど元気な女性を見つけて「君たち3人でローテーションを組んで、交換手

の役割をして欲しい。ベルは必ず1回でとって、朝なら『お早うございます。福岡支店の××でございます。いつもお世話になっております』とここまでいっきに言ってくれ」と命じたんです。一ヶ月もすると、外部のいろんな人に会うと「どうされたんですか?支店長さんかわってから、おたくに電話すると朝から元気をもらえますね」と言われるようになったんです。まあ、こういったことはすべて実践の中から学んだことばかり。本にはそんなこと書いてないですしね。石橋オーナーも本を読んで勉強されたわけではないし…だからうちではほとんど学歴を問うことは無かったですね。むしろ人を見るということが大事だということではないかと思います。

――人を見る…とても難しいことですね。

樋口:例えばCYBERDYNE株式会社の山海嘉之さんはその例ですね。山海さんと東京で会うことがあって、彼は一生懸命に研究内容を説明された。それを聞いた後「いったい何のために研究をなされているのですか?」と私が尋ねたら、彼はこういったんです。

「自分の研究が、世の中の多くの人の役にたてばいいと思ってやっているんです」

「あ、それは当社のオーナー、石橋信夫と言っておいたのですが、しばらくすると「立派な支店長ですな~」という声が聞こえてくるようになった。一年半ほどして自分も一度見に行ったら、年上の部下をしっかり指導していました。

そこで次に人口200万ほどの都市の支店を任せてみようと思ったんです。というのは、年商200億を越えれば支店は支社になる。彼の力量で支店を支社にさせてみようかと…岐阜が丁度その規模だったんです。予想通り彼は岐阜に行った途端ぐんぐん伸ばしていってくれましたね。「企業は人なり」というけれど、まさにその通りですね。事業所はトップが変われば、見違えるような会社になる…大企業でもトップの人事を間違えればあっという間にダメになる。

――バブル崩壊時の「大和団地」の見事な復興も、そういった経験がベースにあったのでしょうか?

樋口:週刊誌では随分叩かれてたね。でも石橋オーナーが作って上場までした会社です。あの時オーナーからは「つぶすわけにいかない。俺もやるから手伝え」と言われました。「それは無理です。私にはそんな能力はありません」と断ったら、怒られましたね。本気で怒られたのは後にも先にもあの時一回だけだと思います

と尋ねました。すると「こういった状態なので、まずは経費を下げないといけないのではないですか?」と答える。

「それであれば首切りですね。でも私は首きりをして、清算するためにここに来たのではない。私は『再建せよ』と言われて来たんです。再建する時に首切りからはじめたら、優秀な人材からやめて行ってしまう。それで再建が出来ると本当に思っておられるのですか?私はそんなことはしない。しかし、全員に給料以上の働きをしてもらうことになる。全員でも860人くらいしかいない。誰がどんな働きをしているかは全部わかる。全員と面談をする」――そう答えて、それを実践しました。

860人の社員の中から一年で130人くらい辞めたかな?人事課長が血相をかえて飛び込んできました。「社長大変です!退職者が多すぎます!」という。

「君は退職者が多いという現象だけを見て大変だというけれど、平成元年~3年に入社した人間が退職者の8割以上を占めているように思う。まずはそれを調べてきなさい」と言ったら、翌日「87パーセントでした」という返事。「今は平成6年。景気が悪いので、優秀な人間を獲得しやすいはず。だったら、130人、新たに採用すれば良い」そう私は判断しました。この血の入れ替えがあって、会社の数字はぐっと伸びたんです。

――やはりすべて「人間」ということですね。

樋口:そう「人間」です。やる気のある人間に、やる気の出る環境を与えれば、自然に会社は伸びるんです。ですので派閥を作ろうとする人間はかならず排除します。目につかない小さなものは別ですが…目立ったものが出来ると環境が整わないし、人間が育たないでしょ。私も派閥をつくったことはありません。「この人は特別に…」ということではなく、頑張って実績をあげて、会社に貢献してくれた人に、それだけの褒賞を与えます。またそれだけで地位を与えることもしてはいけないでしょう。周り人間がその人物をどのように信頼しているのか、それを見極めなければいけませんね。一般に「功あるものに禄を与え、徳あるものに地位を与えよ。」という言葉がありますが、それは「たとえ功労があるからといっても、それを理由としてその者に地位を与えてはならない。品性・見識のないものに地位を与えてしまえば企業はやがて崩壊する」ということも言っている。これは真理だと思いますよ。

別に難しいことではありません。昔から言われていることですから、その通りにすればいいだけのことです。会社の仕事をするのに特別な天才でなければできないことなんて無いでしょう。当たり前のことを当たり前にやってゆく…「凡事徹底」が重要です。これが正しい仕事の進め方です。だから中学しか出てない、高校しか出てないなんてことを何も卑下することはありません。逆に「×× 大学を出た」と学歴を鼻にかけることも馬鹿げた話。要は人間性とやる気の問題ですね。

――社風はこれからも脈々と?それは海外での展開の中でも有効だと?

樋口:そうですよ。それを狂わせたとき、この会社はダメになるでしょう。海外においてもこれは通用すると思います。人間同士ですから。少なくとも私はそう信じています。

――「大阪」が現在抱えている問題点…どういったところにあると思われますか?

樋口:大阪で生まれて育って上場会社になっておきながら、本拠を東京に持って行く…行く方も行く方だけれど、行かす方も行かす方だと思う。

私たちの場合は、創業者は奈良県出身で、大阪で生まれて育った会社。今いるこの本社ビルは1999年に建てられま



した。その時石橋オーナーは車椅子でした。数回しか自分の部屋に入っていません。このビルは車椅子のご自分のために建てられたビルではないことは一目瞭然です。「創立100周年の時に、10兆円規模の会社にしたい」――その夢を実現させる城として建ててくださった場所。そしてこうもおっしゃった。「本社ビルは最後で良い。本社は稼ぐ場所ではない。まずは出先からだ」…それで支店などから先に整備して行かれたんです。どういう気持ちで起業し、どういう気持ちで会社を大きくしてきたのか、その精神を正しく受け止めることが大事なんだと思います。

――関西学院を卒業し、これから世に出る将来のOB・OGに対して、一言いただけますでしょうか？

樋口：自分に信念をもつこと。要領よく生きるのではなく、堂々たる人生を歩んでほしいですね。それが通用しないということは、決してないと思います。

プロ野球の世界を見れば分かるでしょう。あそこには「天才」と呼ばれる人間ばかりが集まっています。しかしそこには歴然とした差が生まれる。なぜでしょう？スターになる選手は、普通の努力以上の努力をしているからに他ならない。要領なんかじゃないはずです。

まあ、私の場合は石橋信夫さんという人に出会えたことが本当に素晴らしかった。私利私欲のために動く人ではなかった。亡くなった時も借金もなければ、莫大な私的財産も持っておられなかった。人のために生きる。世のために生きる…石橋オーナーのような生き方を「堂々たる人生」と言うのでしょう。

――ありがとうございました。

2015年4月30日
場所：大和ハウス工業株式会社大阪本社内
取材：中野順哉／白石歩／増田陽亮

樋口　武男（ひぐち　たけお）
大和ハウス工業株式会社
代表取締役会長・CEO
1938年兵庫県出身。
関西学院大学法学部卒業。
1963年大和ハウス工業に転職。
1993年大和団地社長に就任。
2001年大和ハウス工業と大和団地の合併を機に社長就任。同社を業界トップメーカーの地位に導く。
2004年代表取締役会長兼CEOに就任。
2012年第32回毎日経済人賞を受賞。
2014年旭日大綬章を受章。


神戸三田キャンパス

KG INTERVIEW

利昌工業株式会社

代表取締役会長兼CEO
利倉　晄一氏

大阪から描いた、世界に通用する技術企業

1921年。まだ世の中に電気が浸透していない時代に、発電の絶縁体を「国産化」にしようと考えた利倉駒二郎氏。この類まれな先見性をもつ創業者の後を、31歳という若さで継がれた利倉晄一氏。

――創業95年を目前に今、この大阪に何を見ておられるのか？今回はこの問題について率直にお聞きすることにした。

――今の「元気のない大阪」――どういったところに問題があると思われますか？

利倉：大阪に元気が無いのは、戦後の占領政策に原因があります。例えば米軍が日本全土を占領しようということになると、100万規模の兵士を動員する必要があるでしょう。これを「もっと少ない人員で」となると、機能を一か所に集中させるほかない。そこで東京にすべてを一極集中させるという政策を選んだんです。

それまでの大阪…東京に比類する巨大都市だったことはあなた方も御存じでしょう。現に昭和4年の段階では、大阪の方が東京よりも人口が多かった。

また当時の生産の中心は綿業。日本国全体の輸出の比率で言えば70パーセントが綿業ですから、今の自動車や精密機器などを束ねても到底勝てないほど重要な産業を担っていた都市だったと言えるでしょう。大阪のことを「東洋のマンチェスター」と呼んだ背景にはそういったことがあるんですよ。

ただ綿業は技術的にコピーしやすいものですから、戦後は発展途上国にその首座を持って行かれるわけですが。まあ、日本も英国のお株を同じ手法で自国のものとしたのですから、恨みっこ無しではありますよね。いずれにしても、大阪は大変大きな都市でした。ですから学校を卒業していざ仕事をはじめると、色んな業界の会合というのが当然あるわけですが、そういったものはほとんど大阪で開かれていました。その証拠として大阪の近代建築の一つに中央電気倶楽部というのがあります。「大阪電気倶楽部」ではなく「中央」という名が掲げられている。また綿業会館も「日本綿業倶楽部」ですよね。当時の意識として大阪は「中心」であったと言えるでしょう。「大大阪」と呼ばれたのも、そういった背景があったからに他なりません。

石原産業の創始者石原廣一郎（いしはらひろいちろう）※氏のもとへ、2・26事件の安藤輝三大尉あるいは栗原安秀中尉とも言われているが…彼らが事変を起こす前に資金的援助のお願いをされたのだとか。石原氏は二万円を渡された。もちろん、事件のことをご存じでないのは言うまでもありません。当時の二万円と言えば大金です。当然事変後、協力者として嫌疑がかかる。ところが石原氏は「事変の活動資金？とんでもない。二万円なんて、私の小遣いじゃないか」と言って笑われたのだとか。大阪の財力の大きさを示すエピソードですね。当然企業の本社も大阪にはたくさんありました。それが無くなってしまった…繰り返しになりますが、日本が戦争に負けて、米軍が占領する上で、こんな大きな都市が東京から離れたところにあれば困るわけですね。

――具体的にはどのような政策であったのでしょうか？

利倉：例えばあらゆる業種の工業会というのがありますね。その本部を全て東京にもっていくことになったんです。これは通産省独自の政策というよりは、明らかにGHQの政策を踏襲したといえるでしょう。

もちろん中には反発する工業会もありました。綿業です。しかし戦後復興の中で、「1ドルシャツ」と呼ばれた日本の安価な綿製品が、アメリカの綿業に被害を与えているという訴えがあり貿易摩擦が起きました。それが1955年からはじまる日米繊維交渉へと繋がっていくわけですが、大阪が米国政府を相手に単独で戦えるわけがない。どうしても東京の力が必


利昌工業株式会社　代表取締役会長兼CEO
利倉　晄一（とくら・こういち）氏

要になる。「だったら工業会の本部を東京に移せ」と東京からの声。結局仕方なく移されていく…。

雑誌（週刊誌）も移されました。全国の会社は東京。地方出版は大阪でも良い。この時期にはGHQも占領を解いていましたが、強制的に生み出した一極集中の中央システムを継承した官吏にとっては、その方が統制の上でも便利ですから。戦前までは官僚も頻繁に大阪に出張していましたからね。

これは戦後のことですが、中央電気倶楽部での会合で、日立の方が仰っていた一言。「年3回の会合、そのうち一回くらいは東京でやってくださいよ」――戦後のGHQの政策は、首都にとって、それまでのこういった潜在的な問題を一気に「解決」するきっかけとしては抜群のものだったんでしょうね。

本社機能が東京へ行く…その結果何が大阪から消えたのか？料理屋ですよね。料理屋は東京へ行くか、京都に行ってしまったんです。昔は「大阪の食い倒れ、京都の着倒れ」と言ったもんですが、今は京都が食文化の都市となっていますよね。大阪は？タコヤキ？…（笑）。一流料亭はみんな大阪から離れたんです。

大阪には昔は沢山の芸術家もいましたが、その人たちの活躍する場所がもう大阪には無いじゃないかとなれば、皆東京に行くことに。漫才師に至るまで皆東京に行きますね。

――その他に衰退の理由というのはあるのでしょうか？

利倉：人口の問題ですね。現在の札幌市の人口は200万近い。福岡市は150万。大阪市の人口は270万くらいでしょうか。下手すると札幌に追いつかれそうな状況です。

先ほども話しましたが、かつて大阪は人口が一番多かった。こういった都市は大阪よりも当然人口が少なかったわけです。大阪は減った…しかしこれらの都市は増えている。どうしてだと思いますか？

この理屈は結構簡単なんですよ。一極集中で管理する東京のシステムが、遠隔地である北海道エリアや九州エリアでも始まった――つまり、北海道の「東京」として札幌が機能し、九州の「東京」として福岡が機能しているということですね。まあ、これらの都市は元来本社機能を持っていなかったので、東京型の移植は簡単だったのかもしれません。

それに対して大阪はもともと持っていた本社機能が首都に移転し、権限も首都に移っていった。さらには同じエリアに神戸、京都のような独自の特徴を持つ大きな都市を有している。それらの条件が良いのではないでしょうか？ドバイでは、世界中の一流大学を誘致しています。大阪もそういう学校を精力的に誘致するべきでは。少なくとも国内では慶応や早稲田の分校をつくる。すると慶応早稲田をすべった人でも、大阪で入学・卒業すれば同じですからね。

それと今、名所旧跡として残っているものはすべて昔の人が作ったものでしょ。自然発生的なものはない。とすれば、無くなったものでももう一度きっちり作ればいい。例えば難波宮。あれを再建するとかね。そういった場が出来れば、雅楽など様々なイベントも可能になってくるし、アイディアも生まれてきます。

大久保利通は大阪を首都にしようと考えたそうですね。しかし駄目だった。その理由は陛下との対話にあったという話を聞いたことがあります。明治維新の時、天皇陛下が東京に移られた。その折多くの公家は天皇についていったが、半分は京都に残った。どうして残ったのだと思いますか？そうすることで天皇がいつでも京に帰って来られるからでしょう。いまだに京都の人は「帰って来られる」と思っておられる。当時であればそれはもっとリアリティーがあり、実際に大久保利通は陛下に「そろそろ」と尋ねられたのだとか。すると陛下は「ここで良い」と仰った。陛下がここで良いと言っておられるのに首都を大阪に…とはいきませんよね。まあこれはおとぎ話のようなものですが、実際に大久保はここを首都にしようと本気で考えていたのでしょう。その証拠として残っているのは造幣局ですね。造幣局を首都以外の場所に持っている、そんな国はまずないのではないでしょうか。またその近くに泉布館というのがありますが、あれは鹿鳴館の役割を果たす予定だったんでしょうね。

まあこれも考えてみると当たり前のことかもしれませんがね、薩摩・長州の人にとっても大阪は東京より近いですしね。京都もそば。まさか陛下が東京に行ったっきりとは思ってなかったのかもしれませんね。そういう意味では大阪を首都にという発想はごく自然に生まれたものだったのでしょう。

復興ということを考えるなら、中でも一番大事なことはこの辺りの歴史などを大阪人自身がもっと勉強し、自覚してプライドを持たないといけないでしょうね。そういったためにも、建物が大事なんです。視覚的な刺激があってこそ、意識が根付いていくんだと思いますよ。

――同じような意味で、現在の関西学院もやや押され気味のところがあるような気もしますが。

利倉：それに関しては僕も一つ母校に貢献をしたことがありますよ。大阪城公園の中に「早稲田の森」というのがあります。そのリニューアルをする時に、早稲田大学出身の関西のとある財界人から「利倉さん、見にいきませんか？」と誘われたので、行ってみました。そこに集まる早稲田出身の人たちの姿を見ながら「なるほどな～」とヒントを得て、関学電業会によって天守閣のすぐ下に「関学プラザ」というのを作ったんです。看板もありますよ。

まあ作り物でも良いのではないかと思います。こういったものを同窓が順番に作って行けば、やはり視覚的な効果があって意識に影響を与えるんじゃないでしょうか。そういうことも大事だと思いますよ。

これは冗談ですが、兵庫県知事の井戸さんに「姫路城のそばにつくらせてくれ」と言ったんですが「あれは国宝ですよ！兵庫県の管轄やないんですわ」と言われました（笑）。で、逆に「今、尼崎に森をつくっている。二万坪ほど渡すから、関学で緑化してくれ」と言い返されてしまいましたよ。

先日講演で話をしたのですが、少し前まで関学を「関西の慶応」と呼んでいた時代がありますよね。でももっと前は慶応を「関東の関学」と呼んでいた時代があったことをご存知ですか。文字通り我々は対等だったわけですね。例えば大阪の子が関学に通っていたとして、その親が東京に転勤となると慶応に転入されていたし、その逆もあったんですよ。ですのでこれも意識の問題となってくるわけですが…確かに関学の意識はちょっと弱っていますね。

――大阪が華やかな時代。利倉さんはそこにおられてどんな将来的可能性を見ておられたのでしょうか？

利倉：その時代に仮に見えていたものがあったとしてもね、その後の産業構造自体が大きく変化してしまったので、まあ、それには抵抗できませんよね。これに対処すべく大阪で生まれたのは家電産業です。同様に大阪が生み出した産業は沢山ありますよ。ラーメン産業、スーパーマーケット、組み立て住宅…だけど、失われたものの方が大きすぎた。

それまでは海外に工場を作って安い労働賃金で、というグローバル化の発想はありません。輸出を増やすこと目指した国際化の時代でしたから。グローバル化と国際化は随分考え方が違いますでしょ。グローバル化は一つの価値観でもって統一することですが、国際化はお互いの文化を認め合いながら仲良くするということですしね。その国際化の時代に日本も日本でモノを作って海外に売っていた。そして大阪で沢山のものを作っていたんです。それが構造的に失われたんだから、どれほど新しい産業を考え出してももとの繁栄には到底追いつかない。

まあ、それを元に戻そうなんていうことを本気で考えるのであれば…人に笑われようが、なりふり構わずカジノでも何でも徹底的に進めることやと思いますね。すでにUSJの成功例があるんだから、とにかく人を集めることを考えることでしょう。



――利倉会長が定められた御社の企業理念について、その真意を教えていただけ

ますでしょうか？

利倉：戦中は先生も皆「国家」ばかりを唱えていました。簡単に言えば国家のために死ねということですね。ところが終戦後ころっと先生たちは態度を変えた。突然馬鹿馬鹿しくなり、そこで私が門をくぐったのが関西学院だったんです。

そこで学んだこと…それは「社会への貢献」ということですね。Mastery for service。最初は何のことか分からなかったけれど、徐々にその言葉の重みを感じ、次第に自分の哲学となっていきました。そこで自分の引き継いだ会社にも、この哲学を反映させようと考えたんです。その企業理念とは第一に企業なんですから、その目的は儲けるということ。しっかり儲けて税金をたくさん払う。これは国家への貢献。次に可能な限り頑張って、解雇を止めよう。これは社会に対する貢献。そして最後に技術その他を懸命に学び、世の中の進歩に貢献しよう。この三つが我々利昌工業の仕事なんだということを、今でも社内で話をしています。

企業の目的は金儲けですが、だけど道を選ばない儲けは意味がない。経済と道徳は同じものなんだと思います。社会に迷惑をかけるような企業は、企業として値打ちがないのでね。孔子にこんな言葉がありますね。「君子財を愛す。しかれどもそれを得るに道あり」。確かにその通りだと思います。ただ僕はここにもう一言付け加えたい。「それを使するにも道あり」と。「儲けて税金を沢山国家のために支払う」、「解雇を出さないための儲け」…といったようにね。どの程度実行できているのかは分からないのですが（笑）。

こういった哲学を与えてくれた関西学院――心から感謝しています。これは卒業後数十年たった今も変わらない、僕の偽らざる思いですよ。

最後に…。我らが関学の同窓の一人である宮内氏のオリックス社について触れておきたいと思います。オリックス社は大阪誕生の会社です。多くの在阪の経営人、そして本社機能が東京へ移るという例にもれず、オリックス社も東京へ移転した会社です。

その選択は企業としての採算性を考えた上での事ですが、結果において関西の復権、復興のために役立つ様々な投資を同社が行っていることに私は感銘を受けております。

例えばキタヤード、劇場、ホテル、水族館、マンション等、いずれも関西の繁栄の為になる多角的な投資だと言えるでしょう。

また今回関空の運営権を買い、関西における著名企業に呼びかけ、より発展性のある優秀かつ競争力のある空港に発展させることでしょう。この事はもちろん、関西の経済的地盤の底上げに大きく貢献することになると思われます。

また同氏はカジノに関しても首都たる東京には不要と言い、その言は間接的に大阪の後押しとなっています。

関西ならびに大阪を愛する我々にとって大変嬉しく思い、彼に対しては大阪人の一人として私は感謝もし、また彼が我々の同窓であることに誇りを感じております。

――ありがとうございました。

2015年7月14日
場所：利昌工業株式会社内
取材：中野順哉／松野雄二／増田陽亮／白石歩
※石原廣一郎（いしはらひろいちろう）1890年～1970年。石原産業創設者。2・26事件で逮捕されるが無罪釈放。1945年から1948年までA級戦犯容疑で巣鴨に拘禁されるが不起訴。

利倉　晄一（とくら　こういち）
利昌工業株式会社代表取締役会長兼CEO
1951年　関西学院大学経済学部卒業
（大学在籍中は空手部に所属）
1961年31歳で利昌工業株式会社代表取締役社長就任。
2011年現職就任

KG INTERVIEW

株式会社 三社電機製作所

代表取締役社長
四方　邦夫氏

『オンリーワン』と『コミュニケーション』



株式会社 三社電機製作所　代表取締役社長
四方　邦夫（しかた・くにお）氏

――まず、関西学院大学に進学されたきっかけや入学時の思い出をお聞かせいただけますか？

四方：関学のキャンパスの写真を見る機会があり、「きれいな学校やなぁ。一回見に行きたいなぁ。」と思いました。で、実物を見たら、「これは、ぜひ行きたい。」と思うように。

実は入試の日に、電車の事故があり、遅刻。ダメもとで、とりあえず学校に行ってみたら、同じように遅れた学生がようさんいました。学校の先生は「もう、ダメ。受けられない。」と、学生は「受けさせてくれ。」と言い合いになって、結局、なんとか受験できました。実は、そのとき、やりとりした先生が、大道安次郎教授で、入学後もお世話になりました。不思議な縁を感じました。

――KGではどのような学生でしたか？また、学生時代の思い出があれば教えてください。

四方：文学部の産業社会学専攻でしたが、映画研究会に入り、映画制作にのめりこみました。生まれ育った京都には、撮影所もあり、俳優も技術者もいて、「映画の世界」が身近だったからだと思います。宝塚のファミリーランドがあった場所に当時は撮影所があり、入り浸っていました。卒業後も、できれば、映画関係の仕事にしたいと考えていました。

――その夢はどうなりましたか？

四方：親父からは大反対!!で、当時より、取引のあった松下電器産業（現：パナソニック）に就職することになりました。

――松下電器（パナソニック）での仕事や思い出をお聞かせください。

四方：庄内にあった営業所で働き始めて、7年間在籍しました。最初は総務、その後、営業の仕事もしました。当時の松下は良い意味で「いい加減」。大らかで若手にいろんなことを任せてくれました。ダイレクトメールを使うという営業戦略が、当時の業務用営業では珍しく、これが当たり、社内でも名前が売れて、自分としても自信がつきました。

松下幸之助さんもご健在の時代で、激励の言葉などをかけてくださったこともあります。

――それから、現在の三社電機製作所に戻られたのですね。

四方：これも、親父からの「戻ってこい」の一言で。

開発された直流溶接機が「作ったら売れる時代」で、忙しいけれど良い時代でした。そう意味では、戻ってちょっと気が抜けたかもしれません。

その後、会社のシステム部門を任されることになりました。当時、かなりの大型投資をして、システム開発をすることになり、必死で勉強しました。まだIBMの汎用機の時代でしたが、これもよい勉強になりました。

――お聞きしているとお父様が人生の岐路ではアドバイスをしてくださっているようですが、どのようなお父様でしたか？

四方：一言でいうと「ええ男」でした。時代劇の役者みたいな風貌で、おしゃれで。そして、何よりも人に好かれる人でした。息子から見ても、やきもちを焼きたくなるぐらいの人気者でした。

――その後、社長就任となられるわけですが、三社電機製作所が大切にされていることを教えてください。

四方：ひとつは、オンリーワンとなる製品を開発すること。他社にはない強みをいかに作るかが大切です。

当社は、半導体メーカーとしての専門性・



り、いろんな面でメリットが大きかったと思います。

――現在の関学を見て思うこと、また、関学のOB・OGに対してのメッセージをお願いします。

四方：関学生はスマートで人懐っこい。ほかの大学にはない「ファミリー意識」もあります。これはとてもよいことだと思っています。ただ、大学自体は、もっと積極的になってもいいのではないかと思っています。せっかくいろんな技術的な研究をしているのに、なかなかビジネスにつながっていない印象です。もっと欲を出してもいいんじゃないかなと思います。

――ありがとうございました。

2015年10月6日
場所：株式会社三社電機製作所内
取材：伊賀真理／松野雄二／白石歩

四方邦夫（しかた　くにお）
株式会社三社電機製作所代表取締役社長
1960年3月　関西学院大学　文学部卒業
1963年7月　株式会社三社電機製作所　入社
1986年5月　株式会社三社電機製作所
代表取締役社長　就任

独自性があることが、会社としての存在価値を高めることにつながっています。もうひとつは、社内のコミュニケーションをよくすること。上から下へ「やれ！」という命令だけでは、うまくいきません。これまで議論を戦わすことも多々ありました。現在も、常々、社員には「コミュニケーション能力を高めよう」と言っています。

――社長に就任されてから、株式上場という大仕事をされていますが、いかがでしたか？

四方：平成7年に上場しました。これも父の願いの一つでした。上場の大きな目的は資金調達でしたが、それだけではなく、求人の反応や職場の雰囲気もよくなる一方で、平成7年に上場しました。これも父の願いの一つでした。上場の大きな目的は資金調達でしたが、それだけではなく、求人の反応や職場の雰囲気もよくなる一方で、



KG INTERVIEW

天野酒　醸造元　西条合資会社

会長　西條　和彦氏

――明日へのヒント――

――関西学院の予科（※1）からのご入学とお聞きしておりますが、その時代、この河内長野でも関西学院の名は有名だったのでしょうか？

西條：戦後すぐ……8月20日だったでしょうか。近所の小学校の校庭に米軍が駐屯しました。道路補修のためのエンジニア達でした。河内長野警察の紹介で将校たちは手土産持参で毎晩お酒を飲みに来ていました。直に親しくなったのですが、その話のなかで「君は幾つだ？」「17歳です」「なら間もなくカレッジだね。どこに行くのか？」――そんな話の中で、中尉の人が「関西学院」という名を挙げたんです。

「アメリカ人でも関西学院の名は知っているのか」と大変興味をもちました。当時私は中学4年生。早速担任の教諭に関西学院への進学について相談に行きました。先生からは「関西学院は他の私大の予科と違って数学があるんだ。4年修了での受験は無理だ」と言われ、5年を卒業してから受験しなさいと……。駄目と言われると余計に行ってみたくなりましたね。京都の三高の学生を家庭教師として二か月間、それはそれは厳しい特訓が始まりました。まあ、そのおかげで競争率10倍の大学予科に合格することが出来ました。そんなのが関西学院との出会いだったんですよ。

――実際に関西学院に行かれてのご感想は？

西條：すばらしい先生達との出会いでした。児玉先生、東山先生、そして蛭沼先生。特に二年間お世話になった蛭沼先生（※2）。あの先生のおかげで私は「生き返った」と言っても過言ではありません。

私は皆さんもご存知の終戦前日の爆撃。大阪砲兵工廠にあの時（※3）いた人間の一人なんですよ。その時の傷は今でもこのように残っています（シャツの間を見せる）。

当時私の学校からは17名行っていたのですが、生き残ったのは4名。それも防空壕に逃げ込むことが出来た者が、皆死んでいったという、本当に悲惨なものでした。自分は防空壕に入り切れず、煙突に隠れていたんですが、それで助かったんです。でも生き残って「運がある」などと思うような、そんな気分には到底なれず、何と言ったらいいのでしょう？生き残るというのは、本当にある意味苦しいことなのだと感じました。

そういった当時のささくれた気持ちを真っすぐに生き返らせてくださったのが、蛭沼先生だったんですよ。米軍の兵士に教えられた学校に行って、戦争で受けた傷を治されるというのも不思議ですが、そういった意味でも今強く感じるのは、やはり人というのは「縁」によって結ばれ、お互いに生かされているのだなという思いですね。

関西学院の予科というのは、自分にとっても誇りでしたね。白い線が学生帽に入っている。あれをかぶりたくてね（笑）。当時はここに入りにくいので、皆私学を目指す人間は灘に行っていました。それだけ関西学院は英語が難しかったんです。なんせそれまでは敵国語だったので、学校でもきちっとした英語教育を与えていなかったのでね。

――その時何を学んだとお感じになったのでしょう？

西條：学校で学んだこと。その根幹は「人間関係の教育」だったように思います。蛭沼先生が大変自分のクラスの学生をかわいがってくださったんですよ。春と秋



天野酒　醸造元　西条合資会社　会長
西條　和彦（さいじょう・かずひこ）氏

その常務さんは大阪の北浜で捕まってしまい、日新生命ビルの屋上でドラム缶の上に座らされて…そこから落ちてひどい怪我をされてね。

で、その常務さんのおばさんが私の祖母と親しくしていた関係もあって、うちに逃げて来られたんです。そこで天野山・金剛寺に匿ってもらったんです。さすがにお寺に逃げ込むと、面白いもんで連中も追いかけてこなくなった。10日ほどおられましたね。

その間私は毎日番頭と一緒にお弁当を彼に届けに行っていたんですが、最後に秘書の方が出てきて「坊ちゃん、何年生ですか?就職はなさるんですか?」と聞かれる。私自身は交通論を研究していたので、その方面の仕事を希望しておりましたから、すでに親戚からとある鉄道会社への入社の話をいただいておりました。そのことを申し上げると、「そこは日本で一番給料の安いところですよ。再考の余地はありますよね」と言われる。それで父に相談をしたら「それだったらお前の思い通りにしたらいい」という返事。それで日立製作所に入社することになったんです。

植木等の歌ではないですが、当時のサラリーマンというのは本当に気楽な稼業でした。もともと「いつでも辞めていい」と思いながら仕事をしていましたから、まあ気楽なうえに、楽しかったなという思い出が多いですね。ただね…そこで一生勤めようとは思わなかったですね。どうも大阪出身の人間には、どことなく空気があわないというか(笑)。

結局昭和30年11月にこちらに戻ってきました。

――蔵元という仕事…実際に着手なされた時のご感想は?

西條:その当時この近辺に蔵元は15社ありましたが、正直「もうこれは駄目だ」と思いましたね。15社を枕に討死しなければ…えらい業界に入ったなと思いましたよ。

日立で学んできたような企業的な発想など禁句でした。「そんなガタガタいうな。お前らが食べていける分はちゃんと準備出来ているから」と、それはそれはのんびりとした世界でしたよ。案の定と言いますか、昭和50年ごろに、みな無くなっていきました。とことんいってしまった…という感じですね。

消えていった理由は「品質を追わなかった」の一言ですね。それを追求しないのに販売に力を入れようとしたのが間違いですね。

それと…ネーミングのセンスですね。「天野酒」…平成元年に生み出した名前なんです。これはやはり胸をはれる「業績」だと思いますが、でもこのネーミングで私は父から「出ていけ!」と言われたんですよ。父にしてみれば「どうせこの業界は駄目になるのだからバタバタするな。そんなことより少しでも長らえることを考えるべきだ」というところでしょう。土地もあるし、有価証券もあるし…お前が食っていくことは出来るはずだから、そんな発想でしたね。父とは根本的に哲学が違ったのだと思います。

――「天野酒」のネーミングはどのように?

西條:日立にいた頃、東京で一人暮らしでしたでしょ。休みの日に体を余すので、何か趣味を持たないと、と思ったんです。日立には幸いなことに多くの趣味の会がありました。そこで写真をはじめたんです。嘱託の指導者として中村立行(※4)がおられた。彼が大変酒好きで、その当時うちの酒をよく一緒に飲んだんです。「うめえな!」と言いつつもその名「波の鶴」を見て「こんな平凡な名は止めろよ」と言ったんです。「どんな名前がいいですか?」「一晩考えるわ」…それで色々考えているうちに石川丈山(※5)を思い出して「白扇」という名にたどり着いたんです。ところが調べてみるとすでに登録されていたんですね。そこでその上に何かをつけようということになり、「老松白扇」としたら取れたんですよ。

ところが伊丹に老松という名の蔵元があるんですね。そこの邪魔をするわけにはいかないので、これは止めました。

次のきっかけは吉川英治の「私本太平記」がNHKの大河ドラマになったんですね。その時に天野山で僧兵が酒を造っていたという話がクローズアップされたんですよ。その酒は後に豊臣秀吉にも気に入られたのですが、そうすると伏見の酒が怒るので、「正月と盆以外は京にここの酒を持ち込んではならん」という通達が来る…それほどうまかったんです。

で、これは良い話を聞いたと思い、早速寺に行ったんです。「天野山」の名を使いたいということでね。座主は悪い話ではないし、名前をあげてもいいけれど、使用料を金銭で頂戴することは出来ませんとのことでした。そこで早速富田林税務署でこの話をしてみました。申請の要領によってはお寺でも酒を売ることは出来るが、最終判断は大阪国税局ですという返事。翌日今度は大阪国税局に。

行ってみるとそこに富田林でお世話になった人が酒税の課長をしていたんです。親切に教えていただいて「天野酒」が生まれたんです。やっぱり「縁」ですね。人を欺くことは絶対にしたら駄目ですね。この酒を見るたびに思います。関西学院、蛭沼先生…あの時教わったことが全て一つになって…そんな結晶を見るような思いでこの酒をいつも眺めています。

――ありがとうございました。

2016年7月11日
場所:天野酒醸造元西條合資会社内
取材:中野順哉/松野雄二

※1　予科。大学予科のこと。1918年に公布された大学令および帝国大学官制に基づいて設置された高等教育機関。現在の大学の教養課程に相当する。1955年まで存続した。

※2　蛭沼寿雄(ひるぬま　としお)　1914年~2001年。1949年以来関西学院大学に勤務。英文学科に所属し、言語学、ギリシア語、ラテン語、英語学などを講義。「新約本文批評」など多くの著書を遺している。

※3　大阪砲兵工廠は大口径の火砲を主体とする兵器の製造を担った、アジア最大規模の軍事工場。最大工員数は約6万4000人。「あの日」というのは1945年8月14日午後。約150機のB29による集中爆撃により80パーセント以上の施設が破壊された。構内での死者は382人と言われる。

※4　中村立行(なかむら　りっこう)　1912年~1995年。写真家。酒豪家としても有名。酒を断つために夜できる道楽を探していたところ、飲み屋で借金のかわりに誰かがおいていったカメラを入手して、その道へ。

※5　石川丈山(いしかわ　じょうざん)　1583年~1672年。安土桃山時代から江戸初期にいた武人・文人。徳川家の譜代家臣の家系。大坂夏の陣での軍令違反以後隠棲。その後浅野家に仕えるが、母が死ぬと隠居して京へ。文人としての生涯を貫く。有名な漢詩に七言絶句「富士山」があり、そこに「白扇倒に懸かる東海の天」の一文がある。

西條　和彦(さいじょう　かずひこ)
天野酒醸造元西條合資会社会長
1951年　関西学院大学　経済学部　卒業
1951年　株式会社日立製作所　入社
1955年　西條合資会社　入社



KG INTERVIEW

KG INTERVIEW

オリックス株式会社

前副会長
西名　弘明氏

「まだ大丈夫」ではなく勇気をもって一歩先に出る。

――オリンピックのあった1964年にはじめられたリースビジネス（※）。当時、日本での受け入れはスムーズだったのでしょうか？

西名：まず「リース」という言葉自体が企業間に浸透していなかったんですよ。私が入社したのは、創業して4年後のことですが、その当時でも「リースって何？機械を貸すそうやな…」そんな認識でした。それでもこのビジネスを推し進めたのは日本の社会がそれを必要としていたからなのです。

　日本は高度経済成長期でしたので、設備投資意欲も旺盛で金融機関からの借入れだけでは間に合わず、「リース」を使うことにより最新の機械設備を手にすることができるようになり、中小企業にたいへん喜ばれました。――特に当時はコンピュータが黎明期に入っていた時代でもあるんですね。そろばん、計算機から情報機器であるコンピュータへと、ビジネススタイルが大きく変化する時に「いち早く導入したいけど、機器は大変高価である…ならリースという選択肢がある」そんな新しい「金融」としてスタートしたわけです。

――当初の顧客はどういった企業が多かったのでしょう？

西名：中小企業が多かったですね。当時は資金需要が旺盛だった時代です。マイナス金利などはそれこそ想定外。今は銀行にお金が集まっているが借りたがる人がいない…うまく運用が出来ていない時代ですからね。今とは全く違う状況であったということを前提に考えてみてください。

　銀行が首を縦に振らなければ企業は融資を受けることができない。少しでも不安要素が出てくると銀行が融資に慎重になる。当然中小企業は新たな設備投資をしたくても融資を受けられないですよね。そんな時、リースという「第三の金融」という発想は中小企業には魅力的に感じて下さったようです。

　まあそういった時代背景、もちろん高度成長もあり、そしてコンピュータ導入という環境の変化がありというなかで「リース」は大きく発展していきました。

――オイルショックというのは大きな障壁となったのでしょうか？

西名：高度経済成長していた日本の多くの企業はオイルショックによって大変な不況を経験するのですが、銀行は当然貸出をしぶるようになった。企業はそれでも成長したいのでお金を調達しようとした。結果として何が起きたか…企業がリース会社に殺到したんです。その結果第三の金融としてリースが見直され発展していきましたね。「オイルショック」は中小企業にとっては大変でしたがリースが新しい産業として確立できたのです。

――それは「リース」を含め時代の先を見てこられたということでは？御社の思想としては「先見」という点について何か特別な思想をお持ちなのでしょうか？

西名：オイルショック、バブルの崩壊、リーマンショックなど大きな経済の変化というのはありますが、そこで人よりちょっと早く変化に気づくこと。ただ気づくと言っても「バブル崩壊しますよ！」とか「リーマンショックが起きますよ」といったそのものずばりではなく、何かが起きるんじゃないかという予兆を見逃さないということです。

　例えばバブル崩壊の予兆。当時銀行がとにかくお金を貸す。「土地さえ持っていればお金を貸しますよ」…極端に言えばそんな状態でした。ちょっとこれはおかしいんじゃないか？――それに気づくかどうかということなんです。そしてブレーキを踏めるかどうか。「不動産融資をやめよう」という決断。これが半年早くできるかどうかです。もちろん攻める時も人より早く攻める。守る時は人より半歩早く守る。特別な才能を求めているわけではありません。三年後どうなるかなんて誰にも分からないのですから。それよりも洞察力と、それに対する反応の素早さ。端的に言えばそういう力を持ったトップ、我が社でいえばそれが宮内義彦だったんです。

――よく言われる実体経済と金融市場の乖離についてはどのように思われますか。

西名：銀行の機能が変化してきたということではないでしょうか。世の中が従来の「銀行機能」を求めなくなってきたと言ってもいいかもしれませんね。そもそも銀行は一般の方がお金を預け、そのお金を企業に融資し、企業が事業を発展させ…そんなシステムのなかで発展したものですが、今は…例えば企業が100億円調達しなければならない場合、銀行だけに相談には行かないでしょう。選択肢はもっと多い。つまり金融の多様化が生じているんですよ。

　多様化してくることと、モノからコトへという変化が相まって乖離が生じているんだと思います。モノの世界では設備投資にいくらかかって、そこからこういったモノを生み出して…その結果事業性はあるのかと企業は考え、銀行もその中身を判断して融資する。これからはコトの側面を考えないとなりません。ハードからソフト価値の多様性をどの様に評価・判断するかです。

　ただ日本の経済ということを考えると、こういった消費構造の変化はとても重要だと思います。先ほど高度経済成長期のことに触れましたが、私も当時入社して間なしの時期。一年働けば次の年の給与が10パーセントアップしている…そんなことが今の若い人に想像つくでしょうか。でも今は10年経っても給与が変わらないというケースが多い。そんな状況で働いても将来に希望が持てなければ精神的にも疲れてくるのは当然でしょうね。がむしゃらに仕事をしても高度経済成長のようなことは起きない。経済はローカルからグローバルへと変化、日本も追いつけ追い越せという時代から、今はアジアの国から追われる側になっている。そんな状況で成長を考えるならば、モノから、それこそコトの産業構造をいかに発展させるかに力を注ぐべきでしょう。



オリックス株式会社　前副会長
西名　弘明（にしな・ひろあき）氏

――現代は銀行を含めキャッシュレス時代に向かっていると思います。仮想通貨といったものも出現していますが、その点についてはどのように感じておられますか？

西名：キャッシュレスで決済が進む。これ自体は結構なことだと思います。逆にリアルマネーの偽造が多いので、キャッシュレスはいろんな意味で安全です。アメリカに行ってお店で100ドル紙幣なんか出したら、それはもう入念にチェックされるので（笑）。

　また先ほどの金融の多様化と同じで、昔はドルだけが世界に通用するお金だったのが、今ではいろんなお金がそれに代わっている。となればキャッシュレスというのは非常に現実的な選択だと思います。

　ただ…よく分からないのは仮想通貨ですね。ドルにしろ円にしろ、国がその価値を担保してくれているのですが、ネットで生まれたこういうマネーを保証するものが何か分からない。グローバル化、インターネットの進化といったなかで生まれてきたもので、それこそモノからコトへを象徴するマネーなのかもしれません。膨大な分母の上に成り立っているのも事実でしょうが、伸びるのかどうかも含めて、正直「分からない」としか言いようがありません。

――もろもろお伺いしましたが、並べて「現在の経済の在り方」を西名さんご自身は「どういった状態だ」と感じておられますか？

西名：日本の低成長の原因を大きくとらえると、それは「高齢化」と「少子化」になるでしょう。基本的には「過去の遺産を食べている」という構造になっているのだと思います。お年寄りはお金を持っている方が多い。でもそのお金を使わないし、何事に対しても関心がなくなってゆく。お年寄りが目を輝かせて「スポーツカー買った！」「クルーザー買った！」とはしゃぐ…そんな姿を見ることはないでしょ。お金を使わないと経済は停滞する。逆に若者は車も買わないし、デートも電車で行く…当然ですよね。無理して高い車を買ったり、良い食事をしても、給料が変わらなければ苦しくなるだけですから。つまり低成長の時代はお金を持っている人も、そうでない人も、また個人

007年に共同事業を立ち上げましたが将来の展望はどうなのでしょうか?

西名：2000年にアメリカでは30球団のオーナーが共同出資してウェブサイト運営会社を設立し、年間五億ドルの売り上げを超える急成長を見せています。この成功体験をもとにした動きではあるのですが…どうも日本の球団経営というものには問題が多いように思います。日本の場合はもともと企業の「タニマチ経営」という性格が強い。どうしてそうなるかと言えば、球団経営をすることによって企業イメージを良くしたいという発想がベースにあるからです。「タニマチ」と言えば聞こえがいいのですが、まあ宣伝効果を狙ったものですね。そうすると「自分の会社のブランドイメージが上がればいい」そんな球団経営に陥ってしまう。

すると球団サイドも「負けました。赤字になりました。お金ください」という安易な方向に行ってしまう。パ・リーグの球団はどこも赤字です。でも球団経営はそうあってはいけない。お客さんに「ああ楽しかった!」と思ってもらうと同時に赤字経営ではいけないと思います。

さて収入源は何かといえば入場料ですが、それだけでは賄えません。最近主流になってきているのはネットを含めた放映料です。京セラドームはどんだけ頑張っても35000人以上入りませんが、ネットであれば無尽蔵です。であれば単価100円でも大きな収入になる訳です。アメリカの成功例というのはまさにこれです。セ・リーグはなかなか拘束が多いので着手できていないのですが、パ・リーグはそれが出来つつあります。パシフィックリーグマーケティング株式会社という会社を6チームで設立し、放映権やロゴを管理・運営しているんです。セ・リーグもこの流れへの移行を目指しています。

スポーツだって野球以外にサッカーやバスケットボールなど、選択肢がぐっと増えてきている。となればこのまま何もしなければ球団経営がうまく行くはずがない。それが分かっていて「まだ大丈夫」と自分を言い聞かすように安住するのは、バブル崩壊の時と同様、総崩れになってしまうでしょう。少しでも早く、次の手を打つ——パ・リーグは第一歩をふみだしたということです。

いざ船出してみるとやはり感じるのは、野球は日本だけのものではないということです。東アジア、東南アジアでも需要は大きい。ネットを通せばそれが大きな発展になる。そう実感していますね。どうして日本の野球をもっと海外も含めて放映しないのか。確実にアメリカに出遅れているわけですよ。

——球場の使用料という点では御社の場合、他団体とは違うメリットがあるのではないでしょうか?

西名：京セラドームでは野球を年間60／365日しかしていない。要は京セラドームを残り300日、どう使うかということがポイントになる訳です。おかげさまでコンサートもたくさん開催しております。4万人集まるイベントということでは日本を代表するスタジアムになっています。

——オリックス全体の将来をどのように感じておられますか?

西名：この会社には面白いところがあって、新しい経済的な流れが見えたときに、それをつかむのがいつも早い。例えば大阪のグランフロントにある「ナレッジサロン」という発想はその典型ですね。それまで「なんとかサロン」というのを立ち上げると、企業同士がお付き合いで会員になる…というのが普通でしたが、あそこはすべて個人会員です。個人が10万円の年会費を払って「高くない」と思ってもらえる内容を生み出してゆく。今、会員は2000人を超えています。

またオリックス劇場ですね。もとは厚生年金会館でしたが、それを思い切った改修をしてコンサートのみならずオペラも歌舞伎も提供できる劇場に変えています。再生事業にも力を入れていますし、ゴルフ場や旅館や水族館も経営しています。

新しいビジネスチャンスに出会った時、はやく決断することが出来る会社——それがオリックスだと思っています。

——関学生に一言メッセージをいただけますでしょうか?

西名：関西学院はいい大学だと思います。ただ社会は刻一刻変化しています。そういった価値観がいつまでも通用するとは思いません。

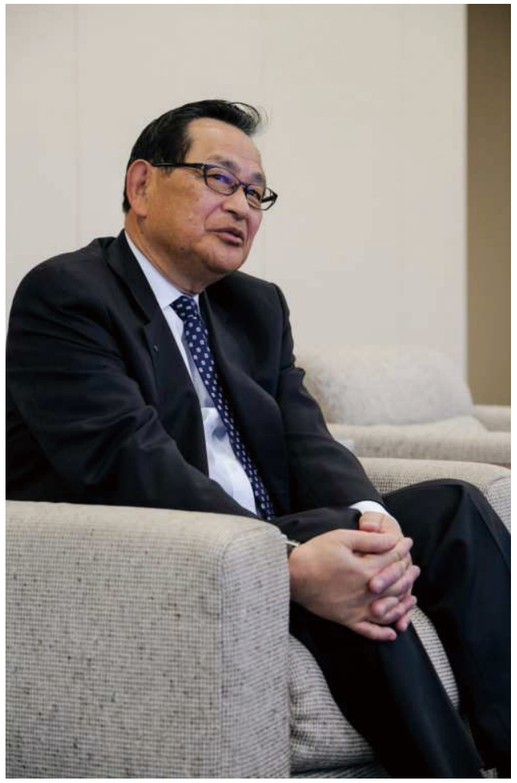
就職についても、国内での成長が望める時代は国内で企業を探し、一生勤め上げるということもいいでしょう。しかし低成長がこのまま続くのであれば、それは現実的ではありません。国内で就職先を見つけることも難しい。ではどうするか…グローバルを意識することでしょう。人材を必要としている企業は日本だけでなく世界にはたくさんあります。働く場は世界中にあります。その為にはまずコミュニケーションがとれることが大事になります。人とのコミュニケーションには特に語学が重要になります。せめて英語ぐらいは話せるようにする必要があるでしょう。

常に「まだ大丈夫」ではなく、「おかしいな」と思えば勇気をもって一歩先に出ること。そして国内がいかに低成長であっても、「今日より明日が良くなる」という思いを捨てず、常に前向きにいてほしい。頑張ってください。

——ありがとうございました。

＊リースビジネス＝会社が使用したい備品を、その会社の代わりに購入し、その備品を貸してリース料をとるビジネス。起源は古代ローマにまで遡るが、近代に入って発展させたのは米国。

2017年2月20日
場所：オリックス株式会社大阪本社内
取材：中野順哉／松野雄二／白石歩



西名　弘明（にしな　ひろあき）
オリックス株式会社　前副会長
1968年　関西学院大学　経済学部卒業
1968年　オリエント・リース株式会社（現オリックス株式会社）入社
1993年　取締役就任
1998年　取締役兼執行役員就任
2005年　取締役兼執行役副社長就任
2009年　オリックス・リアルエステート（現オリックス不動産株式会社）代表取締役会長就任
2009年　グループ関西代表
2009年　オリックス野球クラブ株式会社代表取締役社長就任
2013年　執行役副会長就任
2014年　グループ不動産事業統括
2015年　不動産セグメント担当

KG INTERVIEW

SanRex LEADING THE NEW POWER ELECTRONICS ▶▶

表面処理用電源

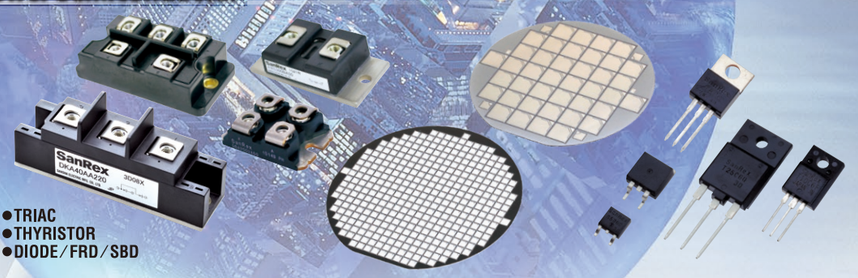
新エネルギー関連機器

IT関連機器

パワー半導体

パワーエレクトロニクスの
幅広いニーズにお応えします。

Power Semiconductor



●TRIAC
●THYRISTOR
●DIODE/FRD/SBD

Power Supply



太陽光発電システム用
パワーコンディショナ
DC 750V DC 1000V
屋内自立盤
100kW 250kW 500kW
●蓄電池一体型もあります。

表面処理用電源
MRMシリーズ

無停電電源装置
BACKUPS 1000シリーズ

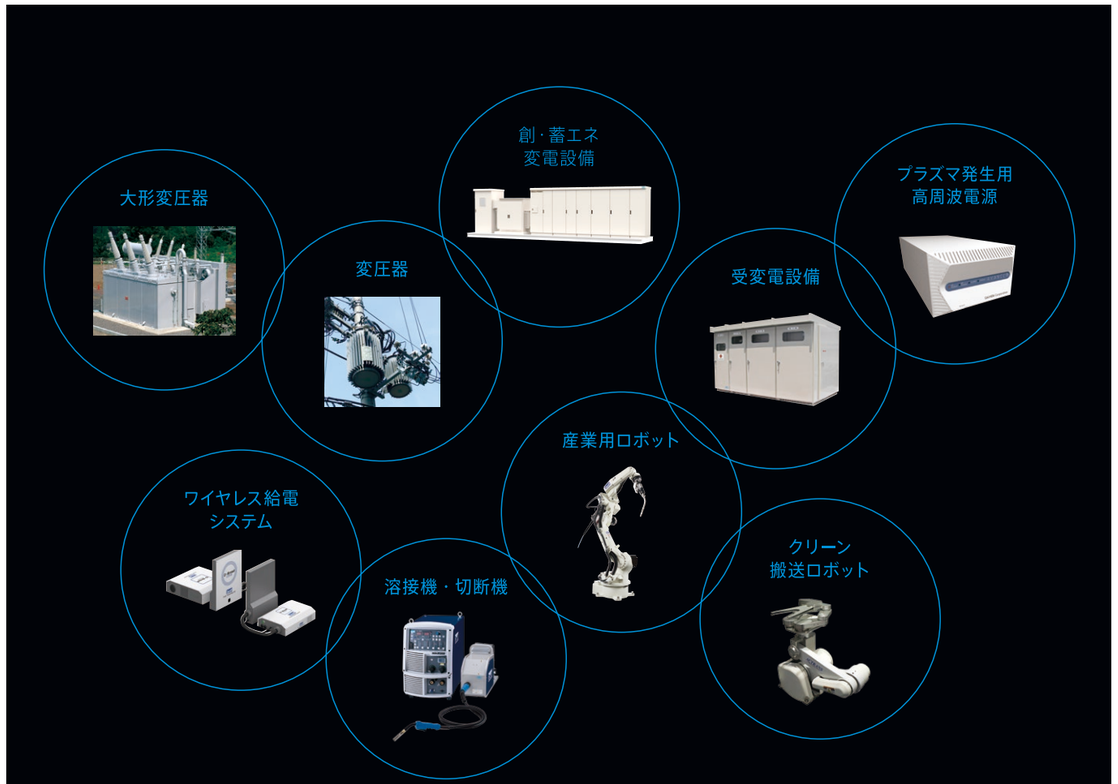
表面処理用電源
DCAUTO HKD-Gシリーズ

※SanRex、DCAUTOは株式会社三社電機製作所の商標または登録商標です。

株式会社 三社電機製作所

営業本部：〒533-0031 大阪市東淀川区西淡路3-1-56 ●東 京 支 店／TEL 03-3834-1700
TEL 06-6325-0500 FAX 06-6321-0355 ●九州営業所／TEL 092-431-7586

www.sansha.co.jp



電力インフラと世界のモノづくりを支える

The World of
DAIHEN

DAIHEN 株式会社ダイヘン

事業領域

変圧器／開閉器／受変電設備／監視制御システム／分散電源機器
耐雷機器／溶接機／切断機／産業用ロボット／クリーン搬送ロボット
プラズマ発生用電源・自動整合器／ワイヤレス給電システム

〒532-8512 大阪市淀川区田川2丁目1番11号 TEL：06-6301-1212（代表）

代表取締役社長 田尻 哲也
1978年 商学部卒

RISHO

2018
97 years
1921
おかげさまでもうすぐ100年

世界に通用する技術でオンリーワン

研究開発型企業



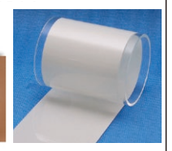
第2研究開発センター（左）と第3研究開発センター


第1研究開発センター

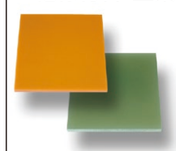
電子材料



LED搭載用プリント配線板材料


LED基板製作用接着シート

絶縁材料/工業用プラスチック


熱硬化性樹脂積層板


熱硬化性樹脂積層管

配電盤用電気機器


モールド進相コンデンサ


アモルファスモールド変圧器

大阪本社　大阪市北区堂島2丁目1番9号　TEL.06-6345-8334　FAX.06-6345-1380
東京本部　東京都中央区八重洲1丁目3番22号　TEL.03-3272-3771　FAX.03-3272-8010
名古屋支社　名古屋市中村区名駅南1丁目18番19号　TEL.052-582-2971　FAX.052-583-1591

営業所　仙台022-214-1803　新潟0256-34-6021　高崎027-323-8009
茨城0294-35-1921　沼津055-932-8281　富山0765-57-1241
松本0263-33-4486　岡山086-244-3185　福岡092-673-4360
ソウル+82-2-701-0355　台北+886-2-27316593　シンガポール+65-6536-4460
フランクフルト+49-69-76725140　無錫+86-510-8528-0990

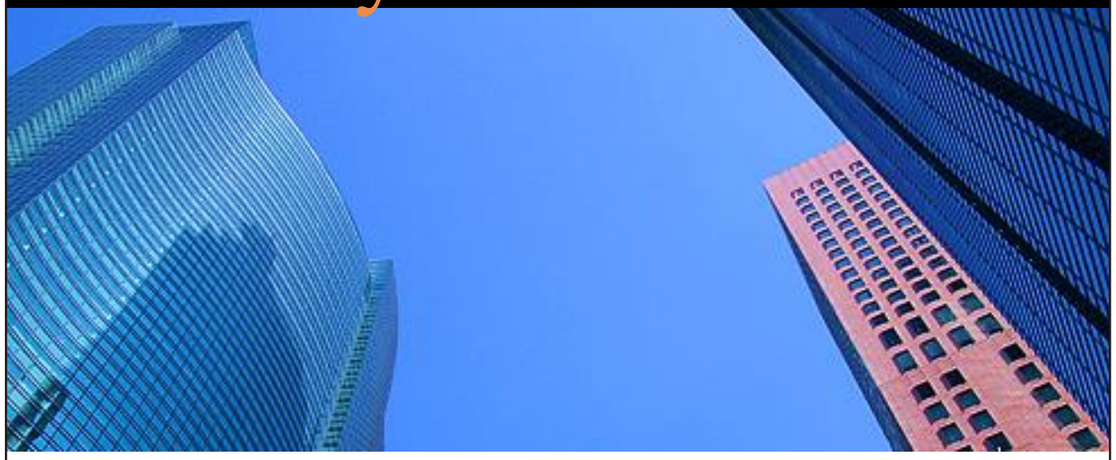
工場　尼崎、滋賀、湖南、中国無錫（電気）、中国無錫（化成）

利昌工業株式会社
SINCE 1921　RISHO KOGYO CO., LTD.

代表取締役会長兼CEO　利倉　晄一（昭和26年経済学部卒）
代表取締役社長　利倉　幹央（平成3年商学部卒）

Chemical Specialties

Mitsuya Boeki Ltd.



鋭い洞察力と機敏なフットワークでファインケミカルの
新しいニーズを開拓する化学品専門商社

〒541-0056 大阪市中央区久太郎町２丁目２番７号 山口興産堺筋ビル
TEL：(06)6260-4581 / EMAIL：info@mitsuya-boeki.co.jp

Mitsuya Boeki Ltd.
http://www.mitsuya-boeki.co.jp



ECO FIRST 環境大臣認定 エコ・ファースト企業
業界初の「エコ・ファースト企業」として環境大臣より認定を受けました。

積水ハウス株式会社
〒531-0076 大阪市北区大淀中1-1-88 梅田スカイビル　www.sekisuihouse.co.jp

グリーンファーストゼロ　検索
COOL CHOICE 未来のために、いま選ぼう。

KOIZUMI

＿違う発想がある

思いもよらない発想と革新性で

「あ!これいいナ」と多くの人々の心を動かす

新しい価値を創造し

暮らしを次のステージへと導きます

小泉産業グループ

Restaurant POPLAR

■レストランご予約・お問い合わせ OPEN 11:00-21:00（L.O 20:00）
TEL 0798-54-1188



レストランポプラ　客席96席、大きな窓から緑を眺めながら和食から洋食まで、手軽なメニューから本格的なコース料理までお楽しみいただけます。


日替わりランチ


レディースランチ


ポプラ御膳


おすすめディナー

平日ランチメニュー例
◆日替わりランチ……915円
◆日替わりお弁当……1,080円
◆レディースランチ……1,080円

ディナーメニュー例
◆ポプラ御膳（甘味・コーヒー付）……1,800円
◆おすすめディナー……2,980円
◆新月コース……2,980円

Banquet ご宴会

関学会館にはレセプションホールをはじめさまざまな大きさの会場があり会議やシンポジウムといった目的からゼミやクラブのOB会・披露宴などの会場としてもご利用いただいております。

同窓会プラン

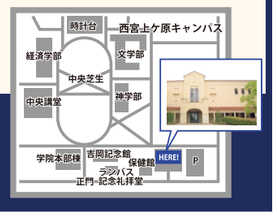
■A プラン［フリードリンク+1アイテム］5,000円
■B プラン［フリードリンク+2アイテム］6,500円

フリードリンク［2時間］
ビール・ウーロン茶・オレンジジュース
＋
オプション（下記よりお選びください）
グラスワイン（白・赤）・ウイスキー・焼酎（麦・芋）・日本酒



Aプランメニュー例
・スモークサーモン レモンクリームソース
・シャリュキュトリー盛り合わせ
・サラダメランジェ
・ピザ カプリチョーザ
・チキンのロースト ガーリックとペッパーの香り
・中華点心二種
・小海老のクリームグラタン
・豚ばら肉の角煮風煮込み ほか

※写真はイメージです。
※表示価格は消費税（８％）を含んだ金額となっております。



■ご予約・お問い合わせ
関西学院会館　予約センター
TEL 0798-54-6013

開室時間 9:00 ～ 17:00
※年中無休（年末年始、夏期特別期間除く）
関西学院会館　検索



関西学院が経営母体のゴルフ場
千刈カンツリー倶楽部

新規会員募集中!

ここでは毎日が同窓会。懐かしい仲間と過ごす、心安らぐ倶楽部ライフを是非とも千刈で！

個人正会員	シニア会員（70歳以上）	若手会員（39歳以下）
会員中心の充実した倶楽部ライフを満喫！	70歳から始まる豊かな倶楽部ライフ！	若手ゴルファーを応援します！
＜入会費用＞ 入会預託金 60万円	＜入会費用＞ 入会預託金 30万円	＜入会費用＞ 入会預託金 10万円
登録料 70万円	登録料 20万円	登録料 50万円
合計 130万円	合計 50万円	合計 60万円
＜年 会 費＞ 48,000円	＜年 会 費＞ 48,000円	＜年 会 費＞ 36,000円

※若手会員は入会後、39歳までは年会費とプレー料金の優遇がございます。
※入会をご検討の方はメンバー料金での入会視察プレーをご利用ください。
※入会に際し書類及び面接の審査がございます。
※入会費用のうちの登録料と年会費には消費税がかかります。
※詳しくはホームページをご覧ください。 http://www.sengaricc.jp/

ご不明な点など、お気軽にお問い合わせください。
営業部／加藤　健（ゴルフ部OB／昭和62年商）
E-mail：katoken@sengaricc.com
〒669-1511 兵庫県三田市山田大道ヶ平605
TEL.079(564)2282　FAX.079(564)2452



三宅 なつ紀（牛乳石鹸歴 7年）

ずっと変わらぬ やさしさを。
牛乳石鹸

さ、洗い流そ。

お風呂に入り、体を洗い流す。
それは毎日を大切に過ごすということ。
石けんを泡立てながら、その日あった出来事をかみしめ、
フレッシュな気持ちで、また明日へ向かっていく。
牛乳石鹸は、そんながんばるあなたのそばにいます。



KidZania 牛乳石鹸はキッザニア東京・甲子園のオフィシャルスポンサーです。

牛乳石鹸共進社株式会社 www.cow-soap.co.jp
〒536-8686 大阪市城東区今福西 2-4-7
お客様相談室：06-6939-2080
代表取締役会長 宮崎仁之（昭和45年卒）

ABC
Asahi Broadcasting Corporation
朝日放送株式会社



ABCキャラクター エビシー
https://www.asahi.co.jp/abciee/

Best Life コンシェルジュ

新築戸建・マンション・リフォーム・既存住宅・土地活用などの
ご相談はもちろん、日々の暮らしに関するどんなご相談にも
Best Life コンシェルジュが心から皆様へお応えいたします。



サンヨーホームズ
イメージキャラクター
芦田愛菜

サンヨーホームズ株式会社

本社／大阪市西区西本町1丁目4番1号　電話(06)6578−3407

ホームページはこちらから
サンヨーホームズ　検索



一冊の本との確かな出会い

さまざまなかたちで「本」と「人」が出会う場所がここにあります。

紀伊國屋書店

梅田本店　グランフロント大阪店　グランドビル店　本町店　京橋店　高槻店　堺北花田店　泉北店　神戸店　西神店　加古川店　川西店

SINCE 1895

大阪・東京・名古屋・福岡
金沢・茂原・富山

Link to Future.

世界、そして未来へとつなぐ



丸善薬品産業株式会社　MARUZEN CHEMICALS CO.,LTD.
代表取締役会長　柳 原 良 一（昭和43年商学部卒）

EIKOKUYA

CAFE 英國屋

大阪・東京・名古屋・京都・神戸

喫茶の専門チェーン
三和実業株式会社

会　長　松本　　孝（経済学部31年卒）
社　長　荻原　　奨（商学部56年卒）
専　務　荻原美津子（経済学部57年卒）

〒542-0076　大阪市中央区難波3丁目7番10号　TEL06-6633-1580（代）　FAX06-6633-1592

千島土地株式会社
Chishima Real Estate Co.,Ltd.

代表取締役　芝川　又美　（昭和46年　文学部卒）

〒559-0011大阪市住之江区北加賀屋2-11-8　Tel:06-6681-6151 / fax:06-6681-6188

DAITORA

鮮度が生きる
暖簾（のれん）の味わい
――蒲鉾のだいとら

大寅

大寅蒲鉾株式会社 Tel06-6641-3451
〒542-0076 大阪市中央区難波3-2-29
http://www.daitora.co.jp

大寅

祝 70 周 年

HAGURUMA

〒599-8101 大阪府堺市東区八下町3-50　株式会社 羽車　取締役会長 杉浦 敬久

夢×技=∞
無限大

YUME TRONICS

安らぎと喜びがある。
生み出すための第一歩は
夢からもらった。
形を築くための第一歩は
技からもらった。
ふたつの可能性が出会う時
私たちのフィールドは
無限大です。

電気・情報通信・計装・土木・空調
栗原工業株式会社
本　　社 / 〒530-0017　大阪市北区角田町1-1　TEL.06(6313)1101
大阪本店/東京本店/神戸・大阪南・横浜・中部・中国・四国・九州・シンガポール支店

先進技術で豊かな未来（あした）を――
ELECTRIC ELECTRONICS TECHNOLOGY

＋技術力
立花エレテックは電機・電子の「技術商社」です。
トータルソリューションで価値ある未来を創造します――。



未来指向というチカラ。

電機・電子技術商社のリーディング・カンパニー。
株式会社 立花エレテック
TACHIBANA ELETECH
東証第一部（証券コード：8159）
本社／〒550-8555 大阪市西区西本町1-13-25　TEL:06-6539-8800
代表取締役社長　社長執行役員
渡邊 武雄（昭和43年 文学部卒）
http://www.tachibana.co.jp/

専門集団による
総合力で
あらゆる社会の
ニーズに迅速に
対応いたします。

［司法書士］
●不動産の権利登記全般
●会社設立・法人登記全般
●債権譲渡登記 等
●民事訴訟手続・供託手続 等
●成年後見サポート業務

［土地家屋調査士］
●土地測量登記・確定測量
●水路明示・道路明示 等
●分合筆・地目変更登記 等
●建物の新築・増築・滅失登記 等

［行政書士］
●諸官庁の証明・許認可・登録 等
●建設業・宅建業・風営法等の許認可
●経営規模等評価申請

［不動産調査］
●重要事項説明書作成業務
●現地調査 等

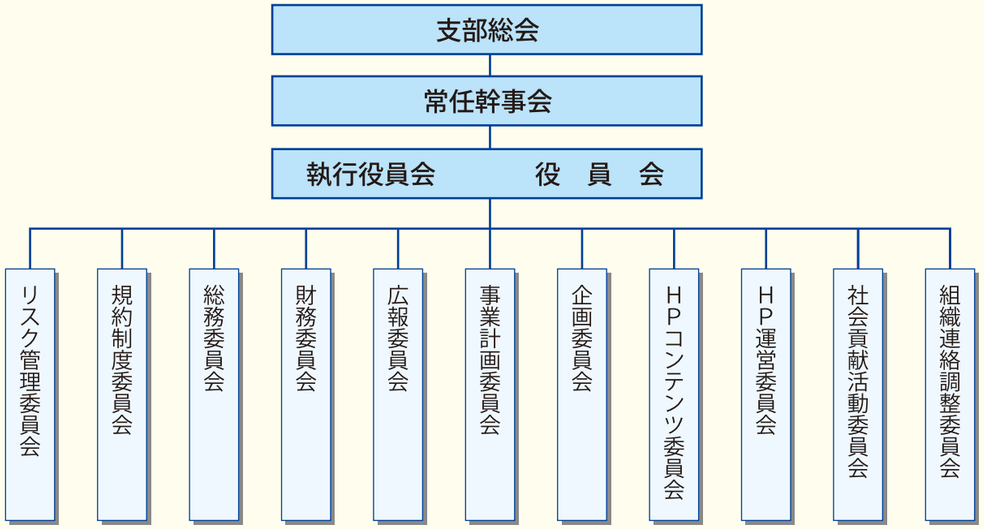
［各種コンサルタント業務］
●開発行為・不動産開発コンサルタント
●社会福祉施設等の運営コンサルタント
●資産運用
●債権債務のソリューション
●各種法律相談

ご相談ください
成年後見のことなら、当事務所へ



鴛田（おしだ）総合事務所
〒532-0012 大阪市淀川区木川東4丁目5番3号 オパル新大阪ビル
TEL.(06)6306 - 2620　／　FAX.(06)6306-4965

関西学院同窓会大阪支部組織図



【歴代支部長】

	氏　名	卒業年度
初代	森田　歳一	大正6年
2代	早川　富之助	大正11年
3代	粟生　鹿之助	大正9年
4代	吉城　貫一郎	大正10年
5代	水谷　勢二	昭和2年
6代	沢田　修太郎	昭和4年
7代	朝長　正男	大正11年
8代	橘　真琴	昭和3年
9代	広瀬　満直	昭和2年
10代	原　清	昭和5年
11代	阪田　一夫	昭和14年
12代	藤田　彌一郎	昭和9年
13代	山田　重迪	昭和13年

	氏　名	卒業年度
14代	野田　豊太郎	昭和9年
15代	荒木　秀雄	昭和12年
16代	木村　正春	昭和13年
17代	畠　房次	昭和10年
18代	山田　基三	昭和18年
19代	白井　修三	昭和19年
20代	瀬川　幸一	昭和23年
21代	下村　興安	昭和31年
22代	中嶋　直躬	昭和28年
23代	恩知　四郎	昭和33年
24代	金織　久恵	昭和38年
25代	簑原　克彦	昭和42年
26代	富田　順治	昭和42年

関西学院同窓会
常任理事　中田恭二
（昭和34年 法学部卒）
〒630-0239　奈良県生駒市青山台342-99

豚饅・焼売などのご用命、
大阪ミナミでのご宴会はぜひ当店で!
蓬莱 本館
㈱蓬莱本館（ほうらいほんかん）
大阪市中央区難波3丁目6番1号
レストラン　TEL.06-6634-6836　FAX.06-6634-5778
ホームページ　http://www.horaihonkan.co.jp/restaurant/
通信販売　TEL.06-6563-6600　FAX.06-6568-6300
ホームページ　http://www.horaihonkan.co.jp/
楽　天　店　http://www.rakuten.co.jp/horaihonkan/

KIMURA FRUIT Sweet & Highest
キムラはフルーツと共に
皆様のヘルシーな生活の
お手伝いを致します。
阪急うめだ本店
千里阪急
川西阪急
西宮阪急
阪急三番街
代表取締役会長　木村 正紀（昭41年法卒・サッカー部OB）
代表取締役社長　森 光太郎（平13年商卒）
株式会社木村商店
〒530-0015 大阪市北区中崎西３丁目１−13
TEL：06-6371-7643　FAX：06-6372-4884

TOYOTA L&F
トヨタL＆F近畿株式会社
代表取締役
梶原　常義
Tsuneyoshi　Kajiwara
〒554−0012 大阪市此花区西九条1-1-51
TEL.06-6462-5302（ダイヤルイン）
FAX.06-6462-5319

関西学院大学同窓会大阪支部70周年
おめでとうございます
〒530-6036
大阪府大阪市北区天満橋1-8-30　OAPタワー
大阪アーバン　エイジェンシーオフィス
担当：中島　賢治　　久保　龍司
TEL：06-6882-7691　　FAX：06-6356-0363
MetLife メットライフ生命
いい明日へ、ともに進んでゆく。

廣田証券株式会社
代表取締役社長　廣田元孝
（昭和52年商学部卒）
〒541-0041　大阪市中央区北浜1丁目1番24号
TEL.06-6201-1181　URL http://www.hirota-sec.co.jp

三和株式会社
代表取締役責任者
加藤 隆正（昭和32年 経済卒）
本　社／大阪市中央区南船場2-3-13　Tel.06-6261-0855
東京店／東京都中央区日本橋人形町2-25-7　Tel.03-3668-0629

関学電業会
会長　四方 邦夫
事務局　〒533-0031 大阪市東淀川区西淡路3-1-56
㈱三社電機製作所 内
TEL. 06-6321-0321
FAX. 06-6321-2337

校歌「空の翼」

北原白秋　作詞
山田耕筰　作曲

一．風に思う空の翼
　輝く自由　Mastery for Service
　清明ここに道あり我が丘
　関西　関西　関西　関西学院
　ポプラは羽ばたくいざ響け我等
　風　光　力　若きは力ぞ
　いざ　いざ　いざ　上ヶ原ふるえ
　いざいざ　いざ　いざ上ヶ原ふるえ

二．眉にかざす聖き甲
　萌えたつ緑　Mastery for Service
　躍々更に朗らよ我が自治
　関西　関西　関西　関西学院
　（以下繰り返し）

三．旗は勇む武庫の平野
　遙けし理想　Mastery for Service
　新月ここに冴えたり我が士気
　関西　関西　関西　関西学院
　（以下繰り返し）

賛美歌「405」

一．神ともにいまして　ゆく道をまもり
　あめの御糧もて　つからをあたえませ
　また会う日まで　また会う日まで
　神の守り　汝が身を離れざれ

二．荒野をゆくときも　あらしふくときも
　ゆくてをしめして　たえずみちびきませ
　また会う日まで　また会う日まで
　神の守り　汝が身を離れざれ

三．御門に入る日まで　いつくしみひろき
　みつばさのかげに　たえずはぐくみませ
　また会う日まで　また会う日まで
　神の守り　汝が身を離れざれ

応援歌「新月旗のもとに」

武石　幸雄　作詞
石田清和喜　作曲

一．若いみどりの朝風に
　鳴れ　伝統の旗の風
　光と競う　尽きせぬ力
　日に夜をつぎし　精華の誇り
　栄光つねに我とあり
　力　力　その名
　関西学院　関西学院

二．いざ　新月の旗の下
　立て　歴戦のつわものら
　岩打つ波音　高ければこそ
　八千枝の緑葉　汝等を讃う
　勝利はつねに共にあり
　伝統　伝統　その名
　関西学院　関西学院

三．執れ　必勝の旗印
　試練の嵐　哮るとも
　厳と固き　我等は強し
　昨日東に　今日また西に
　凱歌はつねに我とあり
　栄冠　栄冠　その名
　関西学院　関西学院



竹中工務店は「最良の作品を世に遺し、社会に貢献する」
という経営理念のもと、手がける建築の一つひとつを
丹精込めてつくってきました。
これからも人々が安全に安心して暮らすための
「まちづくり」にグループの総力で貢献することによって、
サステナブル社会を実現し、
地球の未来につないでいきます。



想いをかたちに 未来へつなぐ
TAKENAKA

株式会社 竹中工務店　本社：〒541-0053 大阪市中央区本町4-1-13 Tel.06-6252-1201 ／東京本店：〒136-0075 東京都江東区新砂1-1-1 Tel.03-6810-5000



編集長／富田　順治（支部長）
編　集／中野　順哉（副支部長）
松野　雄二（副支部長）
岡田　哲弥（常任幹事）
浮田祐三朗（事務局長）
印　刷／白石　博一（副支部長）
デザイン／亀井　裕二
柳本　和久
相田　博
発　行／関西学院同窓会大阪支部

【編集後記】

創立四十周年から現在までの三十年を今一度見直したい――富田支部長のそんな想いから始まった編集でしたが、構想から取材、完成までにかかった時間はほぼ一年。ちょっとした「旅」でした。

特に大阪府下の各支部長からもお話を聞くことが出来たことは、いろんな意味で本当に良い経験でした。皆さん抱えている問題や目指すところは違っても、母校に対する何とも言えない「愛」は一緒だと、それを強く感じる「旅」でした。

どうにかこうにか記念誌も形になりました。「旅」の終りに思うこと。とても月並みではありますが「関学の学生で良かった」という一言です。記事の中には相当感情的な表現もあり、学校としては到底受け入れられないと感じる表現もあるように思いますが、それを含めてすべてがOB『愛』。世の中でもっとも崇高な大学であってほしいという切なる想いに他なりません。汗水流して「嫌がられること」を発信する――これも Mastery for Service のなせる業と思っていただければ幸いです。

ご協力いただきました皆様に心より感謝申し上げます。ありがとうございました。


KWANSEI GAKUIN
MASTERY FOR SERVICE